万葉論
1章　第一巻

万葉集は九州天皇家への鎮魂歌集である。６９０年持統奈良遷都以前の歌は全て九州を詠ったものである。まずどこで詠われたか、大体を地図で示した上で万葉歌へ入っていこう。

九州天皇家の御代の歌

泊瀬朝倉宮の天皇の御代、山跡の歌

万葉集全4516歌のうち栄光の第一首を飾るのは「泊瀬朝倉宮」の天皇の歌である。

籠もよ　み籠持ち　掘串もよ　み掘串持ち　この岳に　菜摘ます兒　家聞かな　告らさね
山跡の國は　おしなべて　われこそ居れ　しきなべて　われこそ座せ　われこそは　告らめ
家をも名をも

なんとも優しい求愛の歌である。なぜこの歌が巻頭を飾る歌に選ばれたのか。その理由は「山跡」にある。むろん「山跡」の國とは神武が建国した「倭」である。この歌は「山跡」賛歌である。神武創建の栄光の國「倭（やまと）」の統治を誇らしげに詠った泊瀬朝倉宮の天皇の歌を万葉編者は第一首とした。泊瀬の天皇の歌がどこで詠われたは不明である。だが私たちは泊瀬の天皇が統治していた「山跡」はどこか明らかにすることができる。古事記には泊瀬の天皇と童女の説話がある。

また一時、天皇遊び行でまして、美和河に到りましし時、河の邊に衣洗へる童女有りき。其の容姿甚麗ししかりき。天皇其の童女に問ひたまひしく、「汝は誰が子ぞ。」ととひたまへば答へて白ししく、「己が名は引田部の赤猪子と謂ふぞ。」とまをしき。爾に詔らしめたまひしく、「汝は夫に嫁はざれ。今喚してなむ。」とのらしめたまひて、宮に還り坐しき。故、其の赤猪子、天皇の命を仰ぎ待ちて、既に八十歳を経き。

万葉第一首の童女は籠を持ち、土を掘る串を持ち、菜を摘んでいる。古事記の童女と万葉集泊瀬の天皇の歌の童女は別人であろう。古事記の童女は天皇の問いにすぐに名前を答えている。それだけではなく「嫁に行かずに私の所に来い。」という天皇の言葉を信じて四十年待っていた。万葉の丘で菜を摘んでいた童女は天皇の問いを無視して答えなかった。実際にはそれはない、と思われるが、天皇はこのように歌ったのである。古事記に登場する「美和河」について、土佐國風土記がその記録を残している。

土佐の國の風土記に云はく、神河。三輪川と訓む。源は北の山の中より出でて、伊予の國に届る。水清し。故、大神の為に酒醸むに、此の河の水を用いる。故、河の名と為す。

（土佐國風土記　神河）

この「土佐國風土記」は貴重な「土佐」の風土記録である。ただ正確に読まれなくてはならない。「土佐」は現在の高知県土佐ではない。

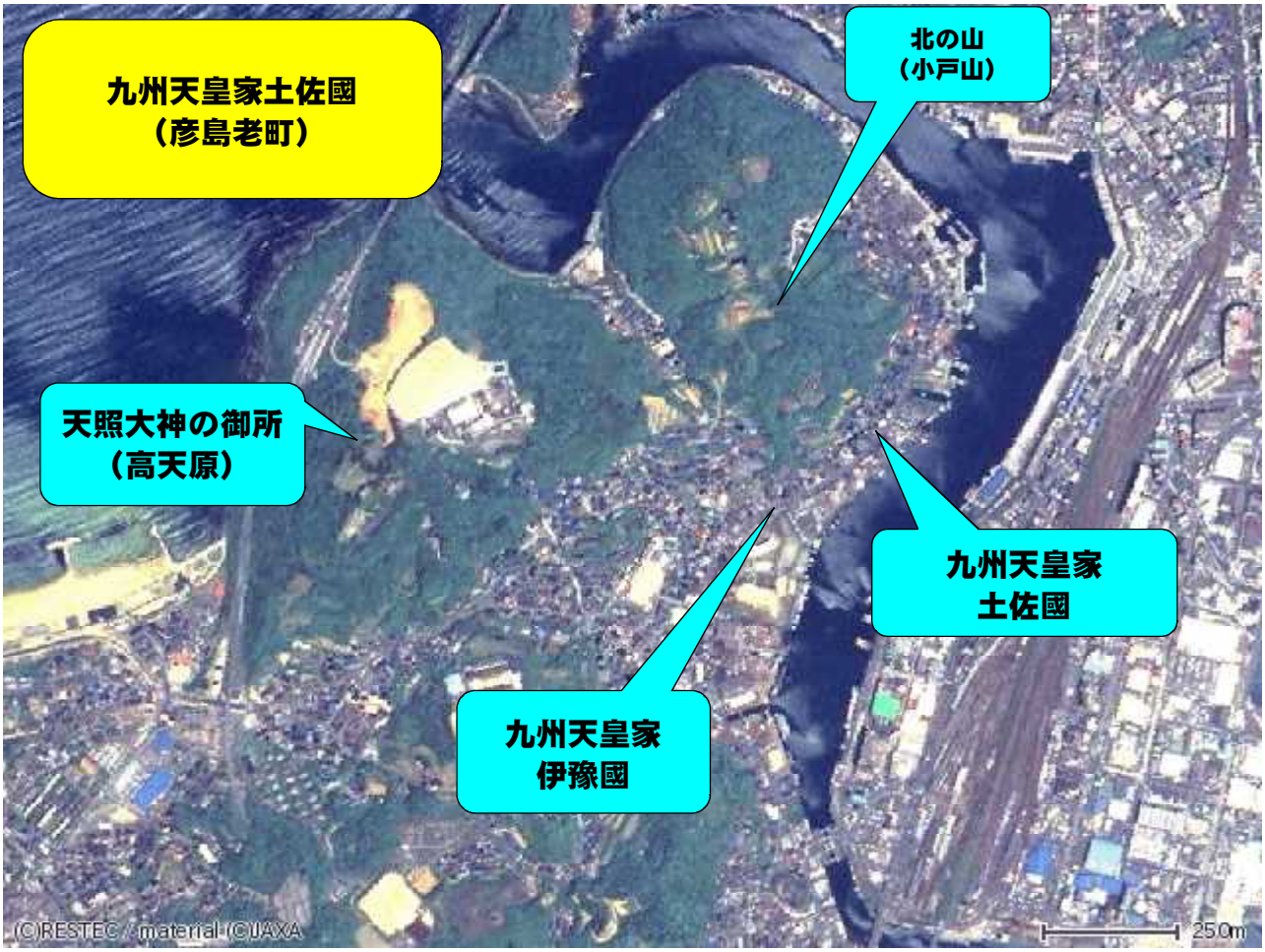
(1)　神河は「ミワガワ」と訓む。「神」を「ミワ」と云ったのである。「神（ミワ）」の訓が「三輪（ミワ）」である。この訓であれば誰が読んでも「ミワ」と読む。だから「神河」を「三輪川」と書いたのである。雄略記の「美和河」は土佐國風土記に記録された「神河」と同じである。雄略は土佐國の「神河（美和河）」に来て童女・引田部の赤猪子に求愛した。

(2)「神」とは誰か。日本古典文学大系風土記は注を入れず、どの神か不明のままにしているが、「神」「大神」と尊称される神は一人しかいない。大神とは天照大神である。この神を天照大神と特定しなければ逸文土佐國風土記の「玉嶋」「土佐高賀茂大社」「朝倉神社」「神河」は読めない。土佐國風土記に登場する大神は天照大神である。無論、天照大神は天皇家の最重要祖先神である。雄略記の説話に登場する「美和河」の「美和（ミワ）」とは「神（ミワ）」の意で、神とは天照大神である。

(3)　神河はその水で天照大神に捧げるお酒を造ったことから「神の河」と呼ばれるようになったという名前の由来を風土記は記している。天王朝の偉大な支配者・天照大神が神である。風土記土佐國は現在の高知県土佐ではない。

(4)　河は土佐國の北の山から流れでて伊予の國に届くという。現代の高知県土佐で「北の山」とだけ云って特定出来る山はない。この土佐國は高知県土佐ではない。九州天皇家の土佐國である。九州天皇家の土佐國は彦島老町に存在した。老町で、「北の山」といえば一つしかない。現在の小戸山である。

(5)　土佐國・北の山・伊予國、等はすべて九州天皇家の古代国家の地名である。これらを支配したのが九州天皇家の祖先神、天照大神である。土佐國風土記は九州天皇家の土佐國の風土記である。



古事記の雄略天皇は九州天皇家の土佐國（彦島老町）の「美和川（神河）」で一人の童女と出会った。雄略天皇が統治していた「山跡」の國とは神武が切り開いた九州天皇家の「倭（やまと）」の國である。

万葉集第一巻第一首の泊瀬朝倉宮の天皇が歌った「山跡」の國とは九州天皇家の「倭」である。万葉集は神武建国の「倭（やまと）」、九州天皇家の「倭（やまと）」賛歌から始まる。

高市岡本宮の天皇の御代、國見の歌

万葉第二番歌は「高市岡本宮の天皇」の國見の歌である。「高市岡本宮の天皇」は通常「舒明天皇」と同一視されているが、日本書紀「舒明天皇」とは別人である。その事実はこの歌が明らかにしている。天皇が詠った「倭（やまと）の國」とは奈良ではない。九州天皇家の「倭（やまと）」である。

山常には　群山ありと　とりよろふ　天乃香具山　登り立ち　國見をすれば　國原は 煙立ち立つ　海原は　鴎立ち立つ　うまし國ぞ　あきつ島　八間跡の國は

名歌である。しかし今まで正確には理解されていなかったというべきであろう。まず訓みの問題がある。

(1)　原文「村山有等」の訓み

通常は「群山あれど」と訓まれ、意味は「多くの山々があるが」である。(日本古典文学大系萬葉集)。しかし、原文は「村山有等」である。「等」は清音「ト」として使われるので、「ムラヤマアリト」と訓むべきであろう。この問題について同補注が詳しい解説をしている。

群山あれど
原文、群山有等。等は元来清音の仮名で、トの乙類に用いられる。この字は、ほとんど清濁に両用の例がなく、清音に用いる。従ってここは、ムラヤマアリトと訓むべきところである。しかし、次の一句トリヨロフは用例がここ一例しか無いために、意味を確定できない。そこでこの一句はすこぶる疑問である。元来、この歌は、一種の国ほめの歌であって、国ほめの歌には一つの形式がある。それは「・・・ナレド」と逆接の前提句をまず歌い出して、それにもかかわらず、とその次に、ほめる言葉を展開するものである。してみるとこの場合もやはり「群山あれど」と逆接の前提句で歌い出したものかもしれない。それ故、疑いを在しながら旧訓に従っておく。　　(日本古典文学大系補注2)

補注のこの説明では「群山あれど」と訓む根拠がない。「トリヨルフ」の意味が確定できないから「群山アレド」と訓んでおくという。しかし先ず「等」は「ト」と清音で訓んで、それから「トリヨロフ」を考えるべきであろう。

(2)　「山常には　村山ありと」の意味

「群山」は原文では「村山」である。「群」も「村」も同じ意味で「集まっている」の意である。「村」には人々が集まって暮らしているから「村」である。「村山」「群山」は「多くの山々」の意ではなく、「集まっている山々」の意である。要するに「群山」とは「連山」の意である。この句の意味は「ヤマトには(名高い)連山がある」となる。

(3)　とりよろふ(取与呂布)　天乃香具山

この句も古来難解とされ、正確な意味は分からまま現在に至っている。同補注を見よう。

この句他例なく、意味不明。トリは接頭語として用いられたものかと思われるが、万葉集中、トリ・・・と複合した動詞では、トリはやはり手に取るという意味が、はっきりのこっているものが多い。してみるとこの場合の解釈は、このままではほとんど不可能となる。あるいは当時何か香具山に関する伝承があって、当時の人々にはすぐ理解出来ることであったのかもしれない。今仮に、ヨルを寄ると解し、ヨロフを寄ろふとする意見(春日政治博士)に従い、都に近く寄っていると見ておく。なお考うべき言葉である。

「取与呂布」は接頭語「トリ」と「ヨロフ」の複合語である。「ヨロフ」は「寄る」で問題はない。だが「都に寄って　いる」では意味をなさない。ここは全く普通の意味で「寄っている」でよい。都に寄っているのではなく「群山」と同じ意味で、幾つかの山々が寄り集まっているという意味である。山々が寄り集まっている。その中の一つが天の香具山という意である。

さて、この「山常」の天香具山とはどこの山か。山頂に立った岡本宮天皇は、「國原は 煙立ち立つ　海原　は 鴎立ち立つ」と詠っている。民家から食事を作る煙が立ちのぼっている。海ではカモメが飛び立っている。このように國が一望できる群山の一つ、天の香具山とはどの山か。

香春一の岳である。香春岳は三連山である。ほぼ500Mの山がそれぞれ独立しながら三つ連なっている姿は特異である。王朝内の諸国には有名な山だったであろう。故に、倭(やまと)には名高い群山(連山)がある、と歌いだしている。天皇が見た倭國の風景を再現してみたいのであるが、残念ながら高市岡本宮の天皇が登った名山、天香具山は現在上半分が存在し

ない。香春岳二の岳からの風景となるが、HPの美しい写真を借りて見てみよう。この風景が岡本宮天皇が國見をした「山常・八間跡」である。

（ http://app.javac.biz/archives/871.html）

＜大意＞
倭（やまと）には名高い群山（連山）がある。その寄り添い連なっている天香具山に登って国見をすれば、國の村々には煙が立ち上り、海原は鴎が飛び立っている。誠に良い國である。秋津嶋、倭（やまと）の國は。

香春一の岳が「天の香具山」である。「海原」とは周防灘である。九州天皇家の高市岡本宮天皇は九州天皇家の「天の香具山」から「山常」「八間跡」の國を見た。九州天皇家の「山常」「八間跡」の國とは香春町、田川市である。

倭健が詠った倭（やまと）

万葉集には収録されなかったが、倭（やまと）を美しく、悲しく詠ったのは倭健である。

其地より幸でまして、三重村に到りましし時、亦詔りたまひしく、「吾が足は三重の勾の如くして甚疲れたり。」とのりたまひき。故、其の地を号けて三重と謂ふ。其れより幸行でまして、能煩野に到りましし時、國を思ひて歌曰ひたまひしく、

倭は　國のまほろば　畳づく　青垣　山隠れる　倭し麗し

とうたひたまひき。又歌曰ひたまひしく、

命の　全けむ人は　畳薦　平群の山の　熊白檮が葉を　髻華に挿せ　その子

とうたひたまひき。此の歌は國思ひ歌なり。又歌曰ひたまひしく、

愛しきよし　吾家の方よ　雲居起ち来も

とうたひたまひき。此は片歌なり。此の時御病甚急かになりぬ。爾に御歌曰みしたまひしく、

　　嬢子の床の邊に　我が置きし　つるぎの太刀　その太刀はや

と歌ひ竟ふる即ち崩りましき。爾に駅使を貢上りき。

是に倭に坐す后等及び御子等、諸下り到りて、御陵をつくり、即ち其の地の那豆岐田に匍匐ひ廻りて、哭為して歌曰ひたまひしく

　　なづき田の　稲幹に　稲幹に匍ひ廻ろふ野老蔓

とうたひたまひき。　　（古事記中巻）

「三重の勾の如くして」も古来難解と云われてきた。三重の曲がりは倭國のどこに存在したのか。恐らく倭國から伊勢に向かう山道に三重に曲がる勾配が急な坂道があった。その坂道を登ると人は皆足が疲れて、「三重の曲がりはきつい。足が疲れる。」と云っていたのであろう。この共通体験を元に、倭健は伊勢のある村まで帰ってきた時、「三重の曲がりを登った時のように足がひどく疲れた。」と疲労を訴えた。これがその土地をその後三重村と呼ぶようになった由縁だというのであるが、この三重は現在の三重県ではない。

話は飛ぶが、壬申の乱の時、天武天皇が「吉野」から「伊勢」への帰国の途上に「三重郡」が登場する。日本書紀では「伊勢の國の三重の郡」という國・郡の関係である。「三重」が「郡」で、「伊勢」は「國」である。現在の「三重県」と「伊勢市」の関係とは逆である。天武紀に登場するこの「三重の郡」が倭健が遠征から疲れ果ててたどり着いた「三重」である。「三重村」は九州天皇家の「伊勢國」に存在した小さな集落だった。その「伊勢國」とは現在の行橋市である。倭健が足の疲労を訴えた「三重村」も九州天皇家の「伊勢國（行橋市）」に存在した。行橋市の小さな「三重の村」からさらに西へ進んだ「能煩野」で倭健は倒れ、望郷の歌を歌う。

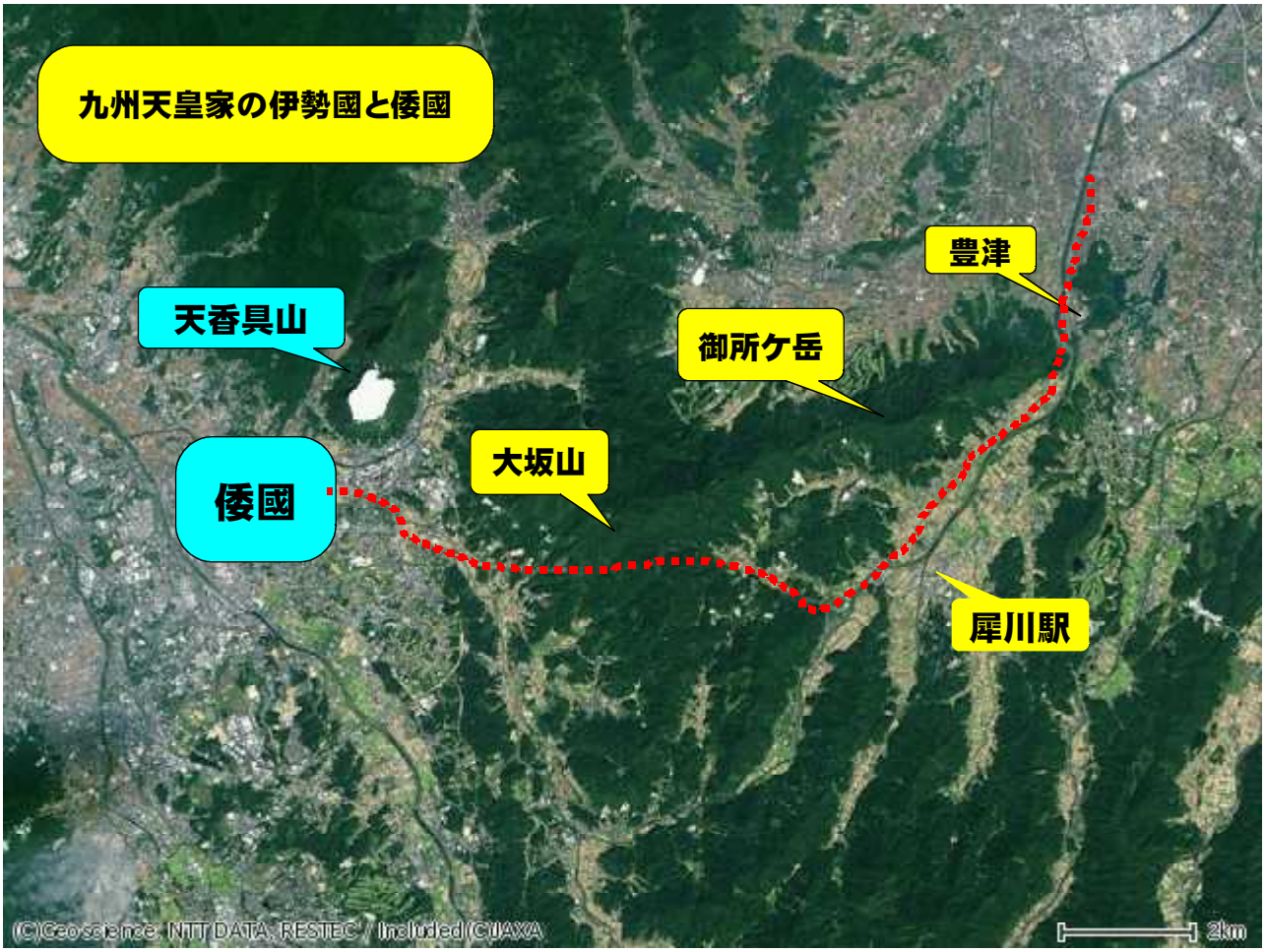
　　倭は　國のまほろば　畳づく　青垣　山隠れる　倭し麗し

「畳づく」は「畳み重ねたようにくっついている（日本古典文学古事記頭注）」の意である。「青垣」は青々とした垣の意で、この場合は「國の周りをとり囲んでいる山々」の比喩として用いられている。倭（やまと）の國は緑の山々に囲まれた盆地であった。「山隠れる」も同じく「山の内に隠っている（同頭注）」の意である。倭健が亡くなる寸前に思い浮かべた麗しい景色の倭（やまと）國とはどこか。幾重にも折り重なった緑の山々に囲まれた美しい田川の町、これが倭健が詠んだ「倭（やまと）」國であった。倭健は「倭國（田川）」の風景をどこに立って見たのであろうか。倭健が「天の香具山（香春一ノ岳）」に登ったという記録はない。倭健は遠征から「倭（香春・田川）」へ還る途中、九州天皇家の「伊勢國（行橋市）」の「能煩野」で倒れた。

この遠征は景行の詔勅によるもので、倭健は父景行天皇から「東の方十二道の荒夫琉神、及び摩都樓波奴人等を言向け和平せ。」との命令を受けて東征に出かけた。その時の東征路を考えてみると古事記では倭健はまず「伊勢」に向かっている。この伊勢に天照大神を祀った「大神神宮」があり、そこには叔母の倭比賣命がいた。倭健はこの叔母を訪ねた。ではこの時倭健は倭國からいずれの道をとって伊勢へ行ったのか。倭（田川）から伊勢（行橋市）へ向かう道は二つある。。仲哀トンネルを通る県道２０１号線と大坂山の南を越える県道２０４号線である。倭健はどちらを通ったか。恐らく２０４号線であろう。この道は神武が「伊勢」の豪族を倒して「倭國」へ向かった道である。途中に「狭井河」があった。神武は後にこの村の首長の娘を皇后に迎えた。２０４号線が神武の時代から「伊勢（行橋市）」と「倭國（香春・田川）」を結ぶ街道だったであろう。

２０１号線には仲哀峠がある。田川郡香春町大字鏡山と京都郡みやこ町勝山松田を跨ぐ100mほどの峠であるが、仲哀天皇がこの峠を通ったからこの名前がついた。だが、ただ通っただけのこ

とであるなら、仲哀峠と名前をつけたりはしない。その名前がつけられたのは仲哀がこの道を切り開いたからであろう。つまり、従来、「倭國」と「伊勢」を結ぶ街道は南の２０４号線、大坂山を越える街道だった。ところが仲哀は「倭國」から「伊勢」に抜ける新しい道を切り開いた。こちらの方が早い。それが２０１号線である。故に難所である峠に仲哀の名前をつけてその功績を讃えたのであろう。



倭健は神武時代からの大道、２０４号線を通って伊勢國に向かったと思われる。倭（香春・田川）から伊勢（行橋）に出るにしても、伊勢（行橋）から倭（香春・田川）へ還るにしても、標高５７３ｍの大阪山を越えなければならない。福岡県道２０４号線は大坂山の南を走るが、大阪山に立てば西に田川の町が見え、東には行橋市が一望できる。倭健は東征に出かけた時、この山の頂から故国、倭（やまと）の國を見て伊勢に下って行ったのであろう。
倭健は故国を偲んで歌い、続いて従軍の兵士に対して歌う。

命の　全けむ人は　畳薦　平群の山の　熊白檮が葉を　髻華に挿せ　その子

この歌の意は難しい。倭健はなぜ最後にこのような歌を歌ったのか。倭健はもはや死を覚悟している。「私はもうここで死んでしまうかもしれない。だが命のあるお前たちは無事に倭國へ帰れ。そして平群の山の熊白檮の葉を髪に挿せ。」
これだけでは何のことやら、意味不明である。「平群の山」を「大和国平群郡の山」と頭注（日本古典文学大系古事記）は解説するが、「平群」は奈良平群ではない。九州天皇家の平群である。だが、なぜ急に平群の山が登場するのか、平群の山の熊白檮の葉を頭に挿すことに何の意味があるのか。
私たちには分からなくても、兵士には倭健の思いは十分伝わったと思われる。倭健はこの歌にどのようなメッセージを込めたのか。ヒントは「平群」ではなく「熊白檮」にある。「白檮」は

神武が宮を建てた「畝火の白檮原」を前提にしている。「白檮」と云えばそれは神武を祀った宮の丘の白檮の木のことだという共通認識があったと思われる。

神武の帝宅は「畝火（香春岳）」の東南の丘、現在の地名でいうと、「高野」に造られた。「高野」の白樫の林を切り開いて造った宮、故に「白檮原の宮」という名前が付けられた。神武が造ったこの「畝火の白檮原宮」は今も存続している。「畝火（香春岳）」の東南の丘（高野）に存在する「貴船神社」である。この神社が真の神武の白檮原の宮である。周知の如く、奈良の「橿原神宮」は明治２３年に「薩長政権」によって新たに造られたものである。「薩長政権」は神武は九州「日向」から東征に出立し、瀬戸内海を東進し、奈良橿原で即位したという偽りの天皇史を作り上げた。一方、津田左右吉はこの東征はあり得ないとし、神武天皇家は元々奈良に存在したという、これまた偽りの天皇史を作り上げた。

神武は九州天皇家の始祖である。そして、死後、神として香春町の「橿原神宮」に祀られた。この宮は倭健の時代も、至上、至高の神宮だったと思われる。倭健は遠征に出かける時に「橿原神宮」で必勝祈願をして、無事帰国できた時はお礼に参拝していたのであろう。ところが今回の遠征ではもはや自分は帰国できそうにない。お前たちは國に帰り、「橿原神宮」に帰国を報告し、神宮の山の白檮の木の葉を髪に挿して無事を祝え、と歌ったのであろう。大坂山頂からの田川市の眺望は　「**畳づく　青垣　山隠れる　倭し麗し**」　と詠われた情景にふさわしい。

神武陵

もう一つ「白檮」から連想できるものがある。それは神武陵である。神武の陵は「畝火山の北の方の白檮の尾の上（古事記))」に存在した。古事記の記述に従えば、神武陵は「畝火山」の「北の方の尾根」にある。「畝傍山」とは「香春岳」である。「香春岳」は三つの尾根からなる。その「北の方の尾根」とは「三の岳」である。当然九州天皇家の人々は皆周知していた陵である。この陵も「白檮」が関係する。倭健はこの神武陵の「白檮」を思っていたかもしれない。日本書紀

で神武陵が登場するのは天武紀上である。

> 是より先に、金綱井に軍せし時に、高市郡大領高市縣主許梅、にはかに口閉びて、言ふこと能はず。三日の後に、方に神に着りて言はく、「吾は、高市社に居る、名は事代主神なり。又、身狭社に居る、名は生霊神なり。といふ。便ち亦言はく、「神日本磐余彦天皇の陵に、馬及び種々の兵器を奉れ」といふ。便ち亦言はく、「吾は皇御孫の前後に立ちて、不破に送り奉りて還る。今も且官軍の中に立ちて守護りまつる」といふ。且言はく、「西道より軍衆至らむとす。慎むべし」といふ。言ひ訖りて醒めぬ。故是を以て、便に許梅を遣して、御陵を祭り拝しめて、因りて馬及び兵器を奉る。又幣を奉げて、高市・身狭、二社の神を禮ひ祭る。然して後に壹伎史韓國、大坂より来る。故、時の人の曰はく、「二社の神教えたまへる辞、適に是なり」といふ。　（天武紀上）

壬申の乱最中の説話である。「高市の縣主許梅（こめ）」に二人の神が降りてきて、「神武の陵に馬と兵器を奉納しろ。」と言う。そこで神武陵を祭って、馬と兵器を奉納した。すると神の言う通りに、大坂から敵軍がやってきた。しかしすでに神の予告があったのであわてることはなかった。神武陵に馬と兵器を奉納することによって勝利することが出来たという説話である。

神武は守護神として祀られている。この時だけのことではなく代々戦いの度に馬や兵器が奉納されたきたのであろう。倭健も東征に当たって神武陵に詣で、勝利を祈願したと思われる。従って、「命あって帰郷できた者は神武陵に詣で、その山に生える白檮の葉を頭に挿せ。」と伝えたのであろう。倭健の歌は「白檮原宮」か「白檮陵」かどちらかに関わる歌である。

神武陵が存在する香春三の岳

これら歌は日本書記では景行の歌となってる。どちらが真実であろうか。

“命の　全けむ人は”　とはあまりにも切ない。死んでいく者の遺言であろう。景行の歌とすれば臨場感がない。やはり古事記が伝えるように倭健の歌と読むべきであろう。

「伊勢（行橋市）」から「倭（香春町）」へは山を越えなければならない。しかし多くの山を越えるのではない。「伊勢」と「倭」を隔てる山は大阪山である。その山に雲が立ち登っている。雲は「倭國」の愛しい妻、愛しい子が住む家の方から立ち登っている。

愛しきよし　吾家の方よ　雲居起ち来も
（懐かしい自分の家の方から雲が立ち上ってくる）

倭健は大坂山に立ち登る雲を見て亡くなった。あと一山越えれば懐かしい故国に帰り着くことができたのに。山の向こうの雲の下はもう「倭國」であった。

みやこ町豊津支所（旧豊津町役場）に入る所まで戻り、左折して豊津支所の前を通り、県道201号豊津犀川線に出て、左折します。県道を西に、豊津の台地から坂を下って行きます。しばらく進むと平地に出て、農地が広がります。県道201号豊津・犀川線から右手の北方向の眺めです。行橋市を通って豊津に向かっていた時、山の反対、北側を右手南方向に見ていました。右の二つの峰は馬ヶ岳です。中央左の高い所が御所ヶ岳です。ずっと左側の見えない所に飯岳山（大坂山）があります。
http://homepage2.nifty.com/kitaqare/kinn13.htm

倭健が病死した地は九州天皇家の「伊勢國」の能煩野だった。この地がどこか正確な特定は難しいが、歌から考えて大坂山が見える地点であろう。犀川駅付近かと思われる。そこから「倭國（田川伊田駅）」に使いが馬で行き、知らせを聞いた皇后や子どもが能煩野に下って来て陵を作った。この距離はどのくらいなものか。かっては実際に車で走って道のりを確かめなければならなかったが、今ではインターネットyahoo地図を利用すれば容易にその距離が分かる。

JR犀川駅～県道２０４号～JR田川伊田駅は約15.025km。徒歩の所要時間は３時間。
車で１８分。　（ http://maps.loco.yahoo.co.jp/maps?lat=）

使いの馬は徒歩の３時間よりもう少し早く着いたかもしれない。倭健の死を聞いた后等が標高５７３mの大阪山を越えて到着するには７，８時間かかったかもしれないが、その日の到着は十分可能である。知らせを受けた后、子息は「倭（田川）」から大坂山を越えて「伊勢（行橋市）」に入り、陵を作り、泣いて歌を詠んだ。

爾に驛使を貢上りき。是に倭に坐す后等及び御子等、諸下り到りて、御陵をつくり、即ち其の地の那豆岐田に匍匐ひ廻りて、哭為して歌曰ひたまひしく

なづき田の　稲幹に　稲幹に　匍ひ廻ろふ　野老蔓　とうたひたまひき。

なお、倭健が帰路とした県道２０４号線は田川市に入るとＪＲ田川犀川線、勾金駅のそばを通り、田川伊田駅の近くで県道４５３号線と交差する。そこが白鳥町である。ここに「白鳥神社」がある。由緒が神社の入り口に掲げられている。

最澄が帰路の途中、夢に「日本武尊」が現れ、「自分は日本武尊である。汝の船路を守り、身を守護するから、昔麻剥を討つために行った豊前國の高羽川の川辺に自分を齋き祀れ」と告げます。最澄は帰国後「高羽川」を訪ねた時、白鳥が飛来して、「真中の山」にとまった。そこが「田川市・伊田」だったのです。そしてそこは景行、倭建が熊襲成敗に向かった時に陣をしいた霊地であったというのです。　　（白鳥神社由緒）

この神社の由緒ではこの神社の丘から、景行・倭健が「麻剥」征討に向かっている。熊襲「麻剥」が治めていた国は彦山川の上流の添田町である。白鳥神社のある田川伊田駅の周辺は東西南北の交通の要所である。景行の「纒向の日代宮」は田川市の中心伊田に存在したのであろう。

いささか倭健に入れ込みすぎた。万葉集に戻ろう。万葉編者が第二首として選んだ高市岡本宮の天皇は倭國の國見を歌った。倭國とは神武が征服して都を開いた倭（やまと）の國、現在の香春町・田川市である。

高市岡本宮の天皇の御代、狩りの歌

万葉三番歌は続いて高市岡本の宮の天皇の狩の歌である。

天皇、宇智の野に遊狩したまふ時、中皇命の間人連老をして献らしめたまふ歌
やすみしし　わご大王の　朝には　とり撫でたまひ　夕には　い倚り立たしし　御執らしの　梓の弓の　加奈弭の　音すなり　朝狩に　今立たすらし　暮狩に　今立たすらし　御執らしの　梓の弓の　加奈弭の　音すなり

八方を治めておいでになるわが大王が朝に手にとって磨き、夕べには弦をはずして立たかけておられる梓の弓の中弭の弦を弾く音が聞こえる。今は朝狩りにお出でになるようだ。今は夕狩りにお出でになるようだ。大事になさっている梓の弓の中弭を弾く音が聞こえる。

玉き春　宇智の大野に　馬並めて　朝踏ますらむ　その草深野

玉のように美しい春　宇智の大野に馬を並べて今頃は朝の狩をしておいでであろう。

作歌者は高市岡本の宮天皇自身ではない。なぜ第三番歌としてこの歌が選ばれたのであろうか。この歌には王者としての清々しい姿が歌われている。このような立ち振る舞いは九州天皇家の天皇の理想の姿だったのではないか。万葉集第一巻が編纂された八世紀はもはや歌に詠われたような時代ではなかった。彼は九州天皇家の天皇が好んだ狩りの姿を懐かしんだのであろうか。

天皇が狩りをした宇智の大野とは九州天皇家の「宇智」の野である。それはどこか。「宇智の野」の名前は九州に残っている。筑前内野がそれである。九州天皇家の高市岡本宮の天皇はここ

で狩りをしていたのである。
「金弭」が難しい。何故なら「金弭の音すなり 」が理解できないからである。「弭」は普通、弦を掛ける弓の先端を言う。弓の上部の弭は「末弭（うらはず）、下部の弭は「本弭（もとはず）という。しかし、その部分が「音」を出すことはない。またここを「金」にする必要は特にない。だが、「奈加（中）」であるなら理解可能である。
では「中弭」とはどこか。矢を番える弦の“ふくらみ”の部分である。弦の中程の位置で「中仕掛け」という。故に「中弭」と言える。では何故、そこが音を出すのか。弓をやったことがある人なら誰しも覚えがあるが、弓の弦を張った時、その張りを確かめるために、その部分を少し引いて離す。その時、弾音が出る。弓を準備する時、そのような“調弦”を必ず行なう。その音が聞こえると、間人連老は歌ったのである。側に仕える者ならば、日常聞く音である。「あぁ、また弓の手入れをされているのだな」と、見なくても音で分かる。
弓は手入れが必要で、使わない時は弦を外して保管する。竹の弾力性を保つためである。弓を布で拭いて湿気を取らなければならない。朝に「とり撫でる」はその行為である。夕に「い倚り立たしし」は弓の弦を外して、まっすぐになった弓を手入れしている姿であろう。朝狩に出かけ、夕狩に出かけるのでは弓の手入れも忙しかったと思われる。この歌は弓の歌である。

中皇命も間人連老も誰か明確ではない。また作歌者が中皇命か間人連老か意見の分かれるところである。「老」が歌を献上する唯の使いだったという解釈もあるが、単なる使いならここに名前を載せることはないであろう。中皇命は女性である。弓にそれほど関心をもっていたとは思われない。作歌者を「老」と見るのが妥当であろう。彦島の地名に「老町」がある。連老はこの地と関係があった人物かもしれない。高市岡本宮の天皇に仕え、天皇の日常をよく知っていた近臣であろう。

高市岡本宮の天皇の御代、讃岐の歌

万葉五番歌も高市岡本宮の天皇の代の歌である。岡本宮天皇は九州天皇家の天皇である。この天皇の代に「讃岐國」と呼ばれた国家は九州天皇家の讃岐國である。九州天皇家の讃岐國とは彦島・老町に存在した國家である。

讃岐國安益郡に幸しし時、軍王の山を見て作る歌

5　霞立つ　長き春日の　暮れにける　わづきも知らず　村肝の　心を痛み　鵺子鳥　うらなけ居れば　玉襷　懸けのよろしく　遠つ神　わご大君の　行幸の　山越す風の　独り居る　わが衣手に　朝夕　還らひぬれば　大夫と　思へるわれも　草枕　旅にしあれば　思ひ遣る　たづきを知らに　網の浦の　海処女らが焼く　塩の　思ひそ焼くる　わが下ごころ

6　山越しの　風を時じみ　寝る夜おちず　家なる妹を　懸けて偲ひつ

右日本書紀を検ふるに、讃岐國に幸すこと無し。また軍王も未だ詳らかならず。ただし、山上憶良大夫の類衆歌林に曰はく、記に曰く、天皇十一年己亥の冬十二月己巳の朔の正午、伊豫の温湯の宮に幸すといへり。

天皇が讃岐に行幸したことは日本書紀舒明天皇には記録されていない。むろん舒明天皇の全ての行動が日本書紀に記載されたわけではないのであるから、讃岐行幸が漏れ落ちたことも想定できる。しかし問題の本質はそこではない。日本書紀舒明天皇と万葉集の高市岡本宮天皇とは全く関係ない別人であるというところにある。万葉の後注作成者が想定している讃岐國は香川県讃岐である。つまり近畿天皇家における讃岐國である。だが万葉集で詠われた讃岐は近畿天皇家讃岐國（香川県）ではない。九州天皇家の讃岐國である。高市岡本宮天皇の「讃岐國」とはイザナギ

イザナミが建国した「四國」の一つの弥生国家である。それは彦島老町に存在した。イザナギ、イザナミは彦島老町に存在した小さな弥生集落である「伊予國」、「阿波國」、「土佐國」「讃岐國」を天王朝の下に統合した。高市岡本宮天皇と「軍王」が行った「讃岐國」とは彦島に存在した九州天皇家の「讃岐國」である。

万葉集の後注を書いた人物が生きた時代は「讃岐國」と云えばもはや近畿天皇家の「讃岐」、香川県であった。故に万葉の高市岡本宮天皇が行った「伊豫の湯」とは愛媛県松山の道後温泉だと想定した。しかし万葉の高市岡本宮天皇が行った「伊豫の温湯の宮」とは道後温泉ではない。

天皇と「軍王」が行った「伊豫の温湯の宮」とは九州天皇家の「伊豫（彦島・老町)」の温泉である。

現在、彦島老町には温泉はでない。その理由は天武の時代に起こった大地震にその原因がある。大地震の結果、湯が出なくなったからである。天武紀にその記録がある。大国主命以来、「伊豫の湯」として名高い温泉は彦島・老町に存在した九州天皇家の「伊豫の湯」である。

高市岡本宮天皇はこの温泉に出向いた。その時、彦島に存在した「讃岐國（老町)」に向かった。従って歌中の「山」とは彦島の小戸山である。小戸山を超えて天皇は九州天皇家の「讃岐」に出かけたのである。

後岡本宮の天皇の御代、伊豫・熟田津の歌

八番　熟田津に　船乗りせむと　月待てば　潮もかなひぬ　今は漕ぎ出でな

有名な歌である。熟田津。月夜。潮。船出。どれをとっても生き生きとした情景が浮ぶ。後註は次のように記している。

伊予の熟田津の石湯の行宮に泊つ。天皇、昔日より猶し存れる物を御覧し、当時忽感愛の情を起す。所以に歌詠を製りて哀傷したまふといへり

後註は「伊予の熟田津」と書いている。この「伊予の熟田津」がどこか古来難問であった。愛媛県伊豫には「熟田津」の地名はない。これも理由の一つであるが、愛媛県伊豫ではこの歌はふさわしくない。「潮もかなひぬ」は通常、潮の干満と理解されている。しかし、潮の干満は格別「適う」「適わない」というものではない。日本国中どんな港にも潮の干満はある。干潮でも満潮でも予め備えておけば船出はいつでも適う。特に「潮もかなひぬ」と詠う理由はない。

この伊豫は九州天皇家の伊豫である。古代、彦島の小戸山の周辺に九州天皇家の土佐國、讃岐國、阿波國、伊豫國が存在した。伊予の熟田津の石湯の行宮とはその伊豫國にあった熟田津である。

熟田津とは彦島老町に存在した港である。「潮もかなひぬ」とは潮の干満ではない。彦島小戸の潮の流れに関わる。関門海峡の潮流は古来「難波」と恐れられた潮の流れである。この海峡は、昼夜四回、響灘と周防灘の水位の変化によって「西流」と「東流」に激しく潮の流れが変わる。その影響で彦島小戸もおよそ１１ノットの速さで潮が流れていた。「潮が適う」とは船出に都合のよい潮に変化したという意味である。この歌は通常白村江への出陣の歌と云われるが、後注を見る限りそのような歌とは思われない。

伊豫國風土記の温泉記録

伊豫國風土記に貴重な記録がある。この風土記として記録された伊豫國とは愛媛県伊予ではない。

＜温泉＞

伊豫の國の風土記に曰はく、湯の郡。大穴持命、見て悔い恥じて、宿奈毗古那命を活かしまく欲して、大分の速見の湯を、下樋より持ち度り来て、宿奈毗古那命を漬し浴ししかば、暫が間に活起りまして、居然しく詠して、「眞暫、寝ねつるかも」と曰りたまひて、踐み健びまししし跡処、

今も湯の中の石の上にあり。凡て、湯の貴く奇しきことは、神世の時のみにはあらず、今の世に疹痾（やまひ）に染める萬生（ひとびと）、病を除やし、身を存つ要薬と為せり。　・・・・・

古代伊豫國にも温泉があったことを記す。記紀で「伊豫の湯」と呼ばれた温泉は九州天皇家の伊豫、彦島の温泉である。温泉が出なくなった原因は「時に伊豫温泉没れて出でず」と日本書紀に記録が残る天武の時代の北九州の大地震であった。

＜天山＞

伊予の國の風土記に曰わく、伊与の郡。郡家より東北のかたに天山（あめやま）あり。天山と名づくる由（ゆえ）は、倭（やまと）に天加倶山（あまのかぐやま）あり。天より天降（あも）りし時、二つに分かれて片端（かたはし）は倭の國に天降（あまくだ）り、片端は此の土（くに）に天降りき。因りて天山と謂う。本（ことのもと）なり。

「伊与の郡。郡家より東北のかたに天山（あめやま）あり」と書かれた「天山」とは現在「小戸山」と呼ばれている山である。「天山」とは「天（あめ）の山」という意味をもつ。なぜこの山が「天山（あめやま）」と呼ばれたのか。下の彦島の写真の「橘の島」に「老の山公園」がある。ここが「高天原」と呼ばれた弥生集落である。天照大神もここに居た。天照大神は伊邪那岐命が禊ぎをした時に生まれたと伝わる。伊邪那岐命の禊ぎの瀬戸とは彦島小戸である。彦島老町こそが「天（あま）」であった。彦島「小戸山」が「天（あま」の山」と呼ばれたのは当然であろう。

一方、「天の香具山」とは香春町の香春岳である。香春町は神武が東征の最後に侵入し、熊襲の奪略した國である。本来は「倭（キ）國」と言った。この土地には「天（あま）」という呼び名はない。だが、「天山」と二つに分かれた故に「天（あま）」という名をかぶせて「天の香具山」と呼ばれたのである。地名説話に過ぎないが、古代の彦島と香春町の繋がりを示している。彦島を支配した「天（あま）」一族が香春町にも侵入していたという事実を背景

＜神功皇后御歌＞

橘の島にし居れば河遠み曝さで縫ひし吾が下衣。此の歌、伊豫の國の風土記の如きは、息長足日女命の御歌なり。

斉明天皇御歌

伊豫の國の風土記には、後の岡本の天皇の御歌に曰はく、みぎたづに泊てて見れば。云々

同じ歌が万葉集巻７・1315にある。こちらには作歌者名はない。「伊予風土記」では神功皇后の歌と明らかにしている。皇后の歌は『橘の島にいるので、河が遠い。河の水にさらさないで下着を縫ってしまったよ』という意である。

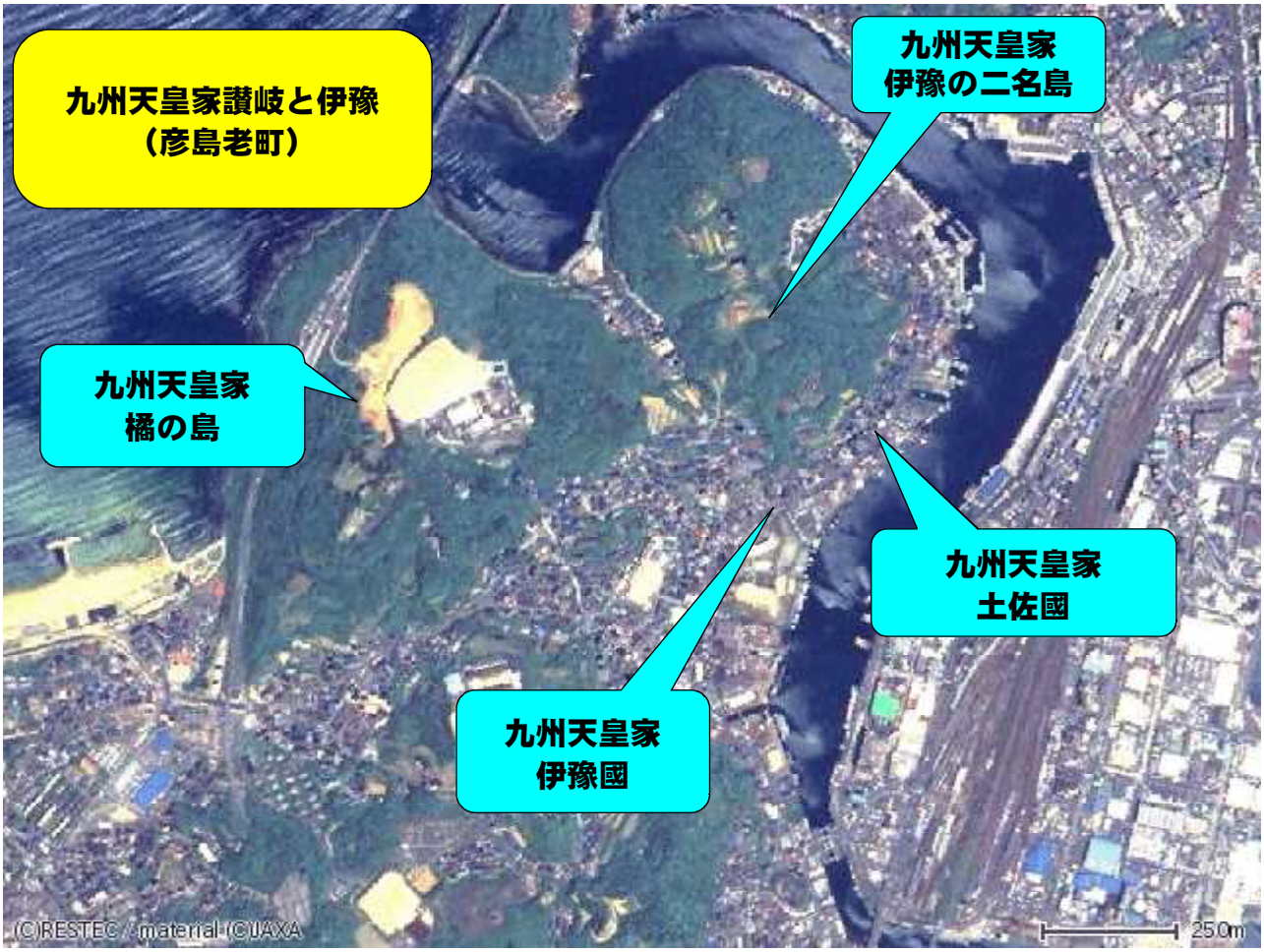
（１）橘の島

「橘の島」とは「立ち鼻の島」の美称である。「立ち鼻」とは地勢から付けられた島の名前である。神功の時代に島だったかどうかは不明である。仮に島でなくなっていたとしてもかっては島だったという認識が生きていた。「立ち鼻の島」とは彦島老町である。これも下の写真を見て確かめて頂きたい。鼻の形をしている。

（2）「橘の島」が何故「伊豫國風土記」に記録されたのか。

神功は「橘の島」にいた。神功の歌を伊豫國風土記が記録した。神功がこの歌を詠った國は「伊豫國」である。つまり「橘の島」は伊豫國にあったということになる。もっと断定すれば「橘の島」が「伊豫國」である。「橘の島」とは彦島老町である。彦島老町が「伊豫國」である。九州天皇家の「伊豫國」は彦島に存在した古代国である。

神功皇后は九州天皇家仲哀の皇后として彦島の「伊豫國」にいた。彦島に八幡神宮に仲哀天皇の「弓掛けの松」が残る。また彦島八幡は仲哀を祀っている。



九州天皇家の「伊豫」を詠った山部赤人の歌がある。

山部宿禰赤人、伊予の温泉に至りて作る歌一首

322番　皇祖神の　神の命の　敷きいます　國のことごと　湯はしも　さはにあれども　島山の宜しき國と　こごしかも　伊予の高嶺の　射狭庭の　丘に立たして　歌思ひ　辞思はししみ　湯の上の　木群れを見れば　臣の木も　生ひ継ぎにけり　鳴く鳥の　声も変わらず　遠き代に　神さびゆかむ　行幸処

反歌

323番　ももしきの大宮人の　熟田津に船乗りけむ　年の知らなく

伊豫熟田津の歌からすでに六十年以上経過して赤人は伊予を訪れ、此の歌を詠んだ。題詞の「伊予の温泉」とは道後温泉ではない。「伊豫の國の風土記に曰はく、湯の郡」と書かれた彦島伊豫の温泉である。赤人の歌の皇祖神は勿論九州天皇家の皇祖神をいう。彦島は皇祖神（天照大神）の國である。彦島老の山が天照大神がいた高天原である。この嶋から天孫・ニニギ尊が小倉北区の足立山に降臨し、神武の時に香春、田川に都を開いた。九州天皇家の皇祖神がいたのが彦島の伊豫である。

歌中に「射狭庭」とある。ここから想起されるのは「イザナギ・イザナミ」の名前である。二人の名前は「射狭のナギ」「射狭のナミ」だったのであろう。

愛媛県伊豫は天皇家の聖地ではない。赤人は伊豫を「島山の宜しき國」と歌っている。もし、あなたが愛媛県伊豫を訪れた時、その地を「島山」だと見るでしょうか。とても「島山」とは見えないでしょう。しかし彦島の小戸山はまさに島山である。赤人は伊豫・熟田津を訪れた時、万葉八番歌を想起している。赤人の歌舞台は九州天皇家の伊豫（彦島）である。「熟田津」とは彦

島老町の港の呼び名であった。
反歌は万葉八番歌の「熟田津に　船乗りせむと」を前提にしている。赤人は船に乗り込んでいるのは「軍人」ではなく「大宮人」と歌っている。これは戦闘のための乗船ではない。軍人が乗船して、いざ出陣という情景ではない。万葉八番歌は６６２年白村江への出陣の歌と考える研究者がいる。しかし八番歌を当時世界最強の国家、唐・新羅軍事同盟と日本・百済の軍事同盟が祖国存亡をかけた決戦に出発する日本軍の司令官が詠った歌とするにはあまりにも緊張感に欠ける。
八番歌の後書きは石湯に泊まったと書いている。温泉に入ってゆっくりした。これが世界最強の国家、唐が待ち受ける白村江へ出陣する日本軍司令官の姿とは考えられない。赤人の「熟田津に船乗せむ」には白村江出陣という認識はない。八番歌は白村江出陣とは全く関係ない歌である。白村江の戦闘は日本國天皇家と唐との激突であった。九州天皇家の出陣はなかった。
この歌は「額田王の歌」となっている。ところが傍註者は奇妙なことを書く。

後岡本宮に天の下知らしめしし天皇の七年辛酉の春正月丁酉の朔の壬寅、御船（みふね）西に征（ゆ）きて始めて海路（うみつみち）に就（つ）く。庚戌に、御船、伊予の熟田津（にきたつ）の石湯（いわゆ）の行宮（かりみや）に泊つ。天皇、昔日より猶ほし存れる物を御覧し、当時忽感受の情を起す。所以に歌詠を製りて哀傷したまふといへり。すなわちこの歌は天皇の御製そ。ただし、額田王の歌は別に四首あり。

傍註者は作歌者は「後岡本宮に天の下知らしめしし天皇」であるという。額田王の歌は別に四首あると書く。傍註者はその四首の歌を知っているからこのように書いたと思われるが、その歌も「熟田津」の歌だと傍註者はいう。この作歌者はどちらか特定できないが名歌であることを考慮して額田王と伝わってきたことを尊重することにしよう。

後岡本宮の天皇の御代、中皇命「紀の温泉」の歌

中皇命、紀の温泉に往しし時の御歌
10　君が代も　わが代も知るや　磐代の　岡の草根を　いざ結びてな
11　わが背子は　仮廬作らす　草無くは　小松が下の　草を刈らさね
12　わが欲りし　野島は見せつ　底深き　阿胡根の浦の　珠そ拾はぬ

この三つの歌の作歌者はだれか。普通に理解すれば三つの歌の作歌者は「中皇命」と考えるべきであろう。問答歌と解釈されることもある。その場合は10番歌と12番歌が男性、11番歌が女性となる。11番歌では「わが背子」と歌っているので、明らかに作歌者は女性である。しかし特に断りがない以上10番歌、11番歌、12番歌は全て中皇命が「紀の温泉」へ行った時に詠んだと解釈すべきであろう。
「君が代」とは「君の寿命」という意である。「知るや」については頭注は次のように解説している。

私の寿命も知っている。シルは知る意味と、領する意味とがあるので、この場合は寿命を支配している意味となる。連帯形。岡の草根にかかる。ヤは間投助詞。連体形の下にもつく。

頭注は「知る」を支配していると解釈している。果たして私たち人間が自分の寿命を支配するなんてことができるか。それは誰にもできない。人は寿命のある限り生き、なくなれば死ぬ。これは身分、性別等に関係なく誰にとっても同じである。また昔も今も変わりない。原文は「吾代毛所知哉」である。この「哉」は反語の「哉」と解すべきであろう。「哉」を反語とする歌は他にある。

高市古人、近江の舊堵（きゅうと）を感傷みて作る歌
32　古の　人にわれあれや　ささなみの　故き京を　見れば悲しも

原文は「古人尓和礼有哉　樂浪乃　故京乎　見者悲才 」である。「有哉」を「アレヤ」と読んでいる。近江の旧都の廃墟を詠んだのは人麿である。「古（いにしへ)」とは「過ぎ去った代」をさすが、古人にとっては「古」は人麿と同じく「九州天皇家」の代をさしている。

私は人麿のように九州天皇家の人間か。いやそうではない。そうではないのに、九州天皇家の都があった近江を見れば悲しい思いがする。

この歌の「哉」は反語である。同じように10番歌の「君が代も　わが代も知るや（所知哉)」も「わが代も知れや」と読むべきであろう。反語の意で「寿命を支配することができようか。できはしない」と読むべきである。だから「磐代」、つまり「磐の寿命」、長寿を意味する縁起の良い名前をもつ磐代の岡に生えている草の根を結びましょうと歌ったのである。

この「草の根を結ぶ」の解釈がまたとんでもなく飛躍している。頭注は「草結びは当時の風俗。幸福を祈る心持を現すらしい。」としているが、歌詞は「草結び」ではなく、「草根」を結ぶである。「草を結ぶ」のではない。確かに「草」は結べるが「草根」を結ぶのは難しい。「草根を結ぶ」を草を引き抜いてその根を結ぶことだと解釈すれば意味不明となる。根を結ぶことなど出来ない。故に、頭注は根を省いて「草を結ぶ」としたのであろう。しかし「草を結ぶ」というイメージもまた難しい。地に生えている草と草を結ぶような風俗は現在どこにも残っていない。当時もそのような風俗があったとは考えにくい。また仮にあっったとしても何のためか、想像できない行為である。

では「草根を結ぶ」とは何か。これはそれほど難しい意味ではない。訓み方を変えれば簡単である。まず「草」は「くさ」ではない。11番歌では「草」を「カヤ」と訓んでいる。従って「草根」も同じ訓みをすべきである。「草根」は「かやね」と訓むべきである。「草」とは「茅」のことである。今「仮廬」を作っている。そのために茅を刈っている。そして苅りとった茅をまとめて茅の根元を結んで束にしている。屋根を葺くためである。茅葺きの屋根を葺くために茅の束を作っているのである。日本民家の茅葺きの模様がテレビ放映されてご覧になった方も多いであろう。束ねた茅で屋根を葺いていく。
この歌も同じ情景を歌っている。旅の夕暮れ。仮廬を早く作らなければならない。忙しく茅で屋根を葺いている。故に「苅り取った茅の根元を結んで早く仮廬を作りましょう。」「その茅は縁起の良い名前の磐代に生えている茅を使いましょう。」このように詠っているのである。
もしこの時通常の解釈のように「野に生えている草（くさ）と草（くさ）を結びましょう」と歌ったんだとしましょう。

オイオイ、ソコノフタリハナニヲシテイルカ。草根ヲムスベトイウイミハ、カリトッタ茅ノ根元ヲムスベトイッテイルノダ。
ジメンニ生エテイル草ト草ヲムスンデドウスルカ。足ガヒッカカッテアブナイデハナイカ。
ソンナコトヲスルヒマガアレバ、オチャデモワカシテ、ミンナニフルマエ。

空気が全く読めない人である。もう誰もあなたの「仮廬」を作りませんよ。「草根」の読みは「くさね」ではなく「かやね」である。「さあ、刈り取った茅の根元を結びましょう。」10番歌と11番歌は呼応している。

大意
君の寿命も私の寿命も支配することができようか。そんなことはできはしない。君の寿命も私の寿命もいつまでか知ることはできませんわ。さあ、だから「磐の寿命」＝長寿の意をもつ縁起のよい磐代の岡に生えている茅を刈り根元を結び、茅の束を作りましょう。

11　わが背子は　仮廬作らす　草無くは　小松が下の　草を刈らさね

わが背子は仮廬を作っておいでになる。もし茅が足らないのなら（長寿である）小松の下に生えている茅を刈ってくださいね。

この歌は簡単なようで、難しい問題を秘めている。

(1)　作歌者・中皇命は女性である。何故なら「わが背子」と歌っているからである。
(2)「君が代」と「わが背子」は同一人物で男性である。
(3)　「君」と「わが」の関係は兄と妹か夫と妻のどちらかであろう。父と娘ではないであろう。
(4)　兄と妹が「紀の温泉」へ旅行したというより、夫と妻が旅行したと読むのが自然である。
(5)「わが君」「わが背子」は中皇命の夫である。従って「わが君」とは斉明天皇ではない。
(6)　表題の「後岡本宮に天の下知らしめしし天皇」とは斉明天皇と云われる。だが中皇命は斉明天皇ではない。もしそうであるならば作歌者を中皇命と書かずに斉明天皇と書くであろう。
(7)　中皇命は後岡本宮に天の下知らしめしし天皇の世に生きた中皇命という名の女性である。結婚しているが夫は誰か不明である。

12　わが欲りし　野島は見せつ　底深き　阿胡根の浦の　珠そ拾はぬ

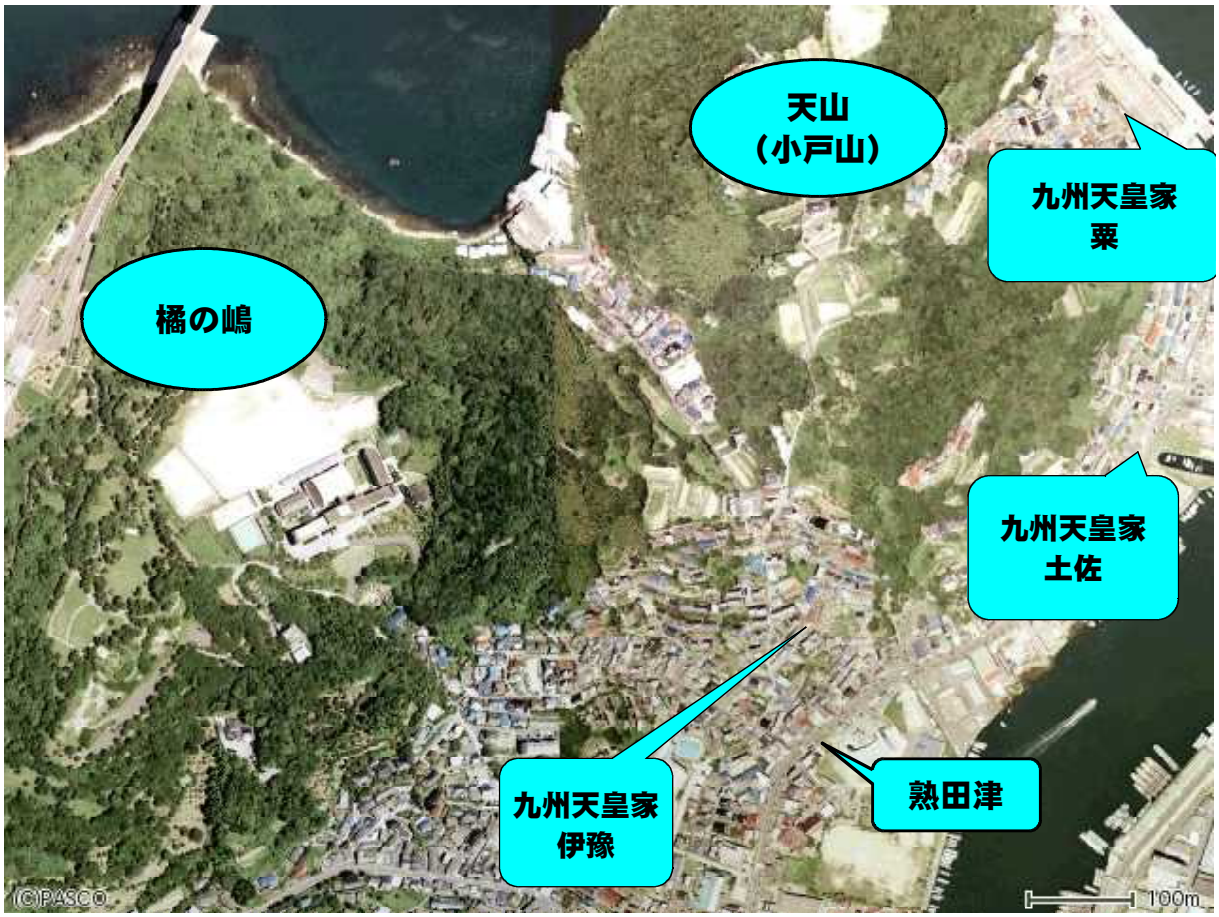
「わが欲りし野島は見せつ」は「私が欲した野島は見せてくれた（頭注）」である。次の「阿胡根の浦」とはどか。歌は、「野島は見せてくれた」が「阿胡根の浦の珠はまだ拾ってはいない」と連なる。「阿胡根の浦」が「野島」に在るのかどうかは不明である。野島の阿胡根の浦とも読めるがそうでないかもしれない。「野島」「阿胡根の浦」がどこをさすか不明であるが「阿胡（顎）」で連想できる場所はある。彦島・老の山である。人の横顔に似たこの嶋には「鼻」と「顎」がある。ではここで真珠が採れたのか。その記録はないことはない。神功皇后がここで真珠を手に入れている。

仲哀紀　秋七月五日に、皇后、豊浦津に泊りたまふ。是の日に、皇后、如意珠を海中に得たまふ。
土左風土記：玉嶋　一つの白き石を得たまいき

「豊浦津」は仲哀天皇の宮が在った湊である。「豊」とは「伊豫二名嶋」の名前の由来となった二つの名前「伊豫」と「豊」の「豊」である。「伊豫」または「豊」と呼ばれた女王の國は彦島老町に存在した。「土佐國」も彦島に存在した九州天皇家の土佐國である。仲哀紀と土佐風土記はと同じ彦島の記事である。土佐國は彦島の老町、ちょうど人の横顔の顎の部分に当たる所にあった。

神功皇后が豊浦津に泊まった日、如意珠を得たと記している。如意珠とは真珠であろう。「阿胡根の浦の珠」もやはり真珠であろう。12番歌は神功説話を前提にして歌っているように思える。

夫と私は紀の湯へ旅をして野島を見物させてもらったわ。神功皇后は「阿胡根」で真珠を得たけれども私はまだ真珠を得ていないわ。



後岡本宮の天皇の御代、中大兄「香具山」の歌

中大兄（なかつおほえ）の三山の歌　１３
香具山は　畝火雄々しと　耳梨と　相あらそひき　神代より　斯くにあるらし　古昔も　然に
あれこそ　うつせみも　嬬をあらそふらしき

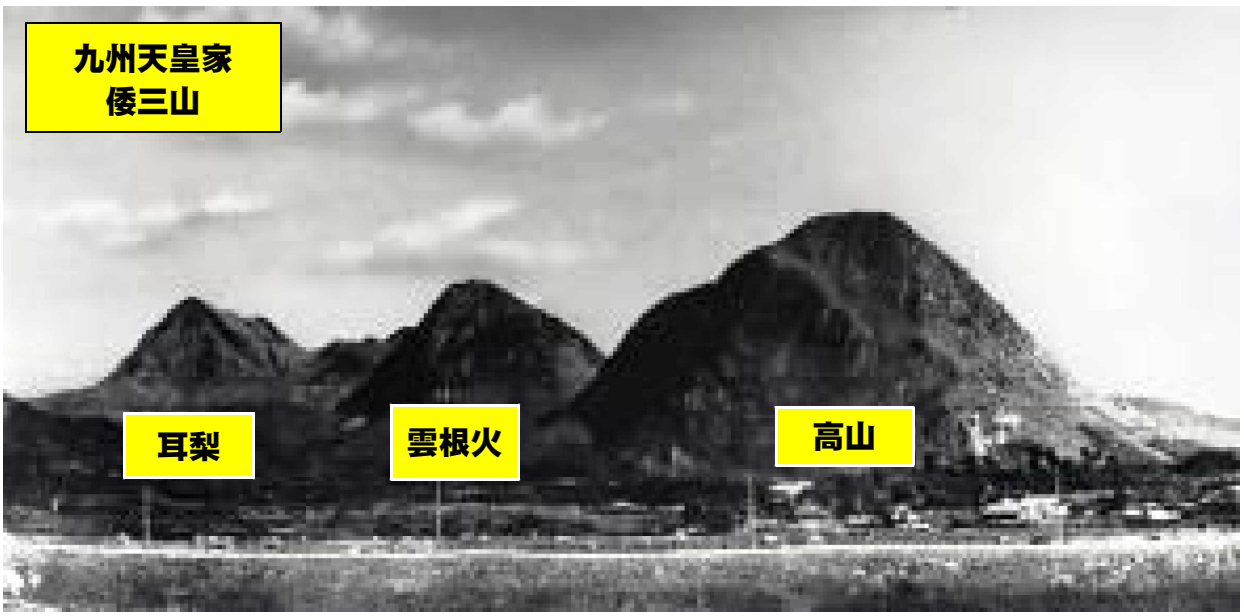
高山波　雲根火雄男志等　耳梨与　相争競伎　神代従　如此に　有良之　古昔母　然に
有許曾虚　蝉毛　嬬乎　相挌良思吉

反歌
１４　香具山と　耳梨山と　あひし時　立ちて見に来し　印南國原
１５　わたつみの　豊旗雲に　入日見し　今夜の月夜　さやに照るこそ

原文では「高山」である。訓みは「香具山」となっている。高を「カグ」と訓む（日本文学大系補注13）。「高山」は「かぐやま」と訓んでいいであろう。「高山」とは香春町にある畝の形をした香春一の岳である。香春町の三山は「一の岳」、「二の岳」、「三の岳」と呼ばれている。「一ノ岳」が高山、天の香具山である。「二の岳」が「畝火」である。中大兄は、「雲根火雄男志」と歌っている。「雄男」は男性に対する形容である。香春岳の頂上には神が祀られている。「一ノ岳」には「辛国息長大姫大目尊」、「二ノ岳」には「天忍穂耳命」、「三ノ岳」には「豊比口羊尊」が祀られている。「一ノ岳」と「三ノ岳」は女神、「二ノ岳」は男神である。この歌に合った配置である。中大兄はこの説話をよく知っていて若き悩みを歌に込めたのである。

この歌は弟の大海人と額田王を争った恋の悩みを歌ったと云われる。女性一人に対して男性二人である。この作歌者である中大兄はどこか弱々しい。この恋いの行方は額田王が天武との間に

娘を産んだことに結果が示されている。中大兄が敗れたのである。九州天皇家の中大兄と弟天武の間では天武の方がずっとやり手だったと思わせ歌である。



播磨國風土記の説話

中大兄が神代の前例としている説話は播磨國風土記にある。

播磨國風土記　揖保郡・上岡の里

土は中の下なり。出雲の国の阿菩の大神、大倭の国の畝火・香山・耳梨、三つの山相鬬うふと聞かして、此を諫め止めむと欲して、上り来ましし時、此処に到りて、乃ち鬬い止みぬと聞かし、その乗らせる船をふせて、坐しき。故、神阜と号く。阜の形、ふせたるに似たり。

この説話は天孫降臨以前の出雲王朝の説話である。出雲王朝の時代、「大倭の三山」が争った。その仲裁のため出雲の国の阿菩の大神が上り来た。「その乗らせる船」と伝えているから交通手段は船である。ところが播磨國の揖保郡の上岡の里まで来たとき、もう決着したか、どちらかが諦めたかで、三角関係の縺れは解消したと聞いた。アホらしくなって、そこで船をひっくり返して休んだ、というものである。

“無駄足だった。男女関係のもつれには介入するものではないな”とため息が聞こえてくるような説話である。さてこの説話で理解が難しいのは阿菩の大神の行路である。一体、阿菩の大神はどのような行路で出雲から「播磨國揖保郡上岡」へやってきたのか。説話の上岡は竜野市神岡町とされる（日本古典文学大系風土記頭注）。ここでは出雲を島根県、大倭を奈良と比定している。この場合、出雲－神岡－奈良という行路は二つ考えられる。陸路は出雲から神岡町へ到る。もう一つは海路である。島根県から出て日本海を西へ進み、関門海峡を通って瀬戸内海を東進、神岡町へ至る海路である。

阿菩の大神は船を使っている。では阿菩の大神はこの海路できたのか。いくら海路が速いと云っても出雲－神岡は陸路の方が速いであろう。出雲を現代の島根県出雲と比定し、風土記「揖保郡・上岡の里」を兵庫県竜野市神岡と比定すると、風土記の行路は非現実的である。

風土記の頭注は「船」を「モフネ（喪棺）の棺である」と解釈しているが、この解釈は原意を外れる。やはり交通手段としての船と考えるべきであろう。阿菩の大神は船で「出雲」から「播磨國上岡」までやってきた。「出雲」を島根県、「上岡」を兵庫県神岡、そして「大倭」を奈良市としてこの説話を読めば、船で来たという想定は不可能であろう。

出雲は九州天皇家の出雲

播磨國風土記の「出雲」とは九州天皇家の出雲である。「播磨國」も九州天皇家の「播磨國」である。九州天皇家の「出雲」が存在したのは小倉南区である。古代出雲王朝は「大國（おおくに）」と呼ばれたように、領土は広く、その領域は小倉南区から行橋市まで及んでいた。播磨國風土記に「大倭」と書かれた國は後に神武が都を開いた「倭（やまと）」、つまり香春・田川市である。風土記の「大倭の国の畝火・香山・耳梨」とは香春岳を指す。

なぜ「出雲（小倉南区）」から「倭（香春町）」へ向かう際に船を利用したのか。現代風に考えれば、小倉と田川を繋ぐ交通路は車を使うなら県道322号線である。ＪＲを使えば日田彦山線である。どちらにしても船を利用することはない。しかし古代において「出雲（小倉南区）」と「倭（香春）」とを繋ぐ街道は県道322号線ではない。古代の道は阿菩の大神のように船で行くこともでき、また陸路で行くこともできた道だった。

阿菩大神の行路はどうだったのか。「伊勢國」の解明がその疑問に答えてくれる。「伊勢」とは三重県伊勢ではない。九州天皇家の「伊勢國」である。「伊勢」とは行橋市である。この「伊勢國（行橋市）」から「倭（やまと）・香春町」に向かう山越えの道、県道201号線が当時の幹線道路である。神武もこの道沿いに存在した「層富縣」の豪族を倒して香春に侵入し、統治を宣言した。神武からずっと降って、奈良から太宰府に向かう役人も行橋市の草野津で下船して、201号線（篠栗街道）を西にとり、山を越えて太宰府に行った。

阿菩の大神は「出雲（小倉南区）」から「播磨國」までは海路をとった。陸路の国道10号線を歩まないで「出雲」から船に乗って周防灘を南下した。上陸地は「播磨國」である。阿菩の大神

は「播磨国」の「上岡の里」まで来た。その時、「もう恋争いは終わったよ」と聞いたのである。そこで船をひっくり返して休んだ。やれやれ、さぞ疲労を感じたであろう。「上岡の里」はひっくり返した船に似ているからこの説話が生まれた。「上岡」は本来「神丘」だった。

船をふせて、坐しき。故、神阜（かみおか）と号く。阜（おか）の形、ふせたるに似たり。

「播磨國」上岡の里とは行橋市の箕島である。行橋市の古代の港「草野津」に入るには箕島から入ったと伝わる。箕島は現在は陸続きであるが古代は嶋であった。この嶋が播磨國風土記の神阜（かみおか）である。この嶋の姿は風土記が伝えるように確かに船を逆さまにしたように見える。

（http://image.search.yahoo.co.jp/）

ここが播磨風土記の上岡である。反歌で歌われた「印南國原」とは行橋市簑島である。またもう一つの反歌で詠われた「わたつみ」とは周防灘である。周防灘の上にかかる雲に入日がさし、赤く輝いた。今宵の月夜は美しいであろうと詠んだのである。

倭建の香具山の歌

天の香具山は倭建の歌にも詠われている。歌は古事記にある。

其の國（甲斐國）より科野國に越えて、乃ち科野の坂の神を言向けて、尾張國に還り来て、先の日に期りたまひし美夜受比売の許に入り座しき。是に大御食献けり時、其の美夜受比売、大御酒盞を捧げて献りき。爾に美夜受比売、其れ意須比の裾に、月経着きたりき。故、其の月経を見て御歌曰みしたまひしく

ひさかたの　天の香具山　利鎌に　さ渡る久毘　弱細　手弱腕を　枕かむ
我はすれど　さ寝むとは　我は思へど　汝が著せる　襲の裾に　月立ちにけり

とうたひたまひき。爾に美夜受比売、御歌に答えて曰ひしく

高光る　日の御子　やすみしし　我が大君　あらたまの　年が　来経れば
あらたまの月は来経往く　諾な諾な諾な　君待ち難に　我が著せる　襲の裾に
月立たなむよ

といひき。故爾に御合（みあひ）したまひて、其の御刀（みはかし）の草那藝剣を、其の美夜受比売の許に置きて、伊服岐能（いぶきの）山の神を取りに幸行でましき。

（古事記中巻・小碓命の東伐）

古事記は九州天皇家の口伝書である。倭建の説話における「甲斐國」「科野國」「尾張國」は北九州に存在した古代國である。美夜受比売の家は古代「尾張國」にあった。姫の家を訪れた倭建は天香具山を詠った。古代尾張國の美夜受比売の家は天の香具山（香春岳）が見える場所にあっ

た。歌のきっかけは美夜受比売の意須比（襲）の裾に月経血が付いていたことである。

ひさかたの　天の香具山　利鎌に　さ渡る久毘　弱細　手弱腕を　枕かむ　我はすれど
さ寝むとは　我は思へど　汝が著せる　襲の裾に　月立ちにけり

久方の天の香具山に鋭い鎌のような隊形をなして、“首（雁か？）”が渡っていく。その鳥の首のようなあなたのか弱い腕を、か細い腕を枕にして寝ようと思うのだが、枕にして一緒に寝たいと願うのだけれど、あなたの着ている襲（上着）の裾に赤い満月が昇ってしまいました。

状況は具体的で、紛れる余地はない。

(1)　美夜受比売は意須比（襲）を着ていた。
(2)　その襲は真っ白い。
(3)　その裾に赤い月経血がぽつんと付いていた。
(4)　それがまるで小さな赤い月が昇ってきたように見えた。
(5)　倭建は月経血を赤い満月に見立てて、「月立ちにけり（月が昇ってしまった）」と詠った。

高光る　日の御子　やすみしし　我が大君　あらたまの　年が　来経れば　あらたまの
月は来経往く　諾な諾な諾な　君待ち難に　我が著せる　襲の裾に　月立たなむよ

輝かしい太陽の御子。八方の領土を統治されている我が大君。新しい年が来れば、新しい月は消えてしまいます。分かっています。分かっていますわ。あなたの任務はよく分かっていますとも。でも私はあなたが待ち遠しくてたまりません。とても待ちきれなくて私が着ている襲の裾に月が昇ってしまったのですわ。

倭建は月経血を赤い満月と機転を利かせて詠った。美夜受比売もまた「ちょっと出かけてくるよ。」と云って出かけたきり何十日も帰って来なかった倭建に対して「長い間帰って来ることがなかった事情は頭はよくよく分かってはいますが、やっと帰ってきたあなたに体が腹を立ててしまい月経になってしまったのですわ。」と皮肉を云ったのである。二人の絶妙な問答歌でした。

近江大津の宮の天皇の御代、井戸王の近江の歌

額田王の近江國に下りし時作る歌、井戸王すなわち和ふる歌　１７
味酒　三輪の山　あをによし　奈良の山の　山の際に　い隠るまで　道の隈　い積るまでに
つぼらにも　見つつ行かむを　しばしばも　見放けむ山を　情なく　雲の　隠さふべしや

「味酒」と「三輪の山」がセットで歌われている。酒は天照大神に奉納する酒である。土佐國風土記に「神河」と記録されている河がある。天照大神に供えるお神酒を作ったことからこの河が「神河」と呼ばれるようになったと云う。「神河」は「みわかわ」と読む。その訓が「三輪」である。これならだれでも「みわ」と読む。「神」と「三輪」は同意である。神とは天照大神である。「三輪の山」とはこの河の源の山で、彦島の小戸山である。

額田王が下った「近江國」とは九州天皇家の都、近江である。額田王は九州天皇家の都、倭（やまと）から近江國へ下った。近江國とは小倉南区である。

小倉南区の曽根に九州天皇家の都があった。そこに「大津」が存在した。「大津」というのであるから周防灘から船が出入りすることができた大きな湊と思われる。現在、小倉南区曽根には小倉港や門司港や新門司港のような大きな港はない。それどころか曽根の海は港には全く適さないように見える。現在の曽根の海を見るとここに古代、港が存在したとは思えない。だが「企救郡誌」「豊前國誌」「小倉誌」には船着き場の記録が残る。

九州天皇家の都、近江の記録

＜企救郡誌の着場橋＞

往古此湊は入江にして、旅船を掛る湊なりしに仍船の着場と言し餘波なりとぞ。
和気清麿卿も此湊に船を泊給ひぬ。又延喜年中菅原道實卿、筑紫に左遷給ひし時、しばし此湊に船を掛たまひしと雖も、今は陸田となり。一筋の細流れ在りて、石橋を渡せり。
此石橋は保元二年平判官康盛の造立なり。慶長年中細川忠興朝臣、此橋を小倉に引給ひてより、跡に石橋を渡す。今城内北の丸の橋是也。http://www.geocities.jp/kikunosato2005/sub81.html）

企救郡誌では「着場橋」という名前で紹介されている。九州に流された和気清麿はこの湊に船を泊めたと伝えられる。道真も太宰府へ流された時、小倉南区の湊に船を泊めている。道真の船の大きさは不明であるが、瀬戸内海を航海してきた船であるから、当時としては最も大きな船だったのではないだろうか。その船が企救郡の着場橋の湊に泊まったというのである。ここが「大津」と判断して良いであろう。企救郡誌が書かれた当時はもはや陸田となりで一筋の河が流れているだけでその川には石橋が懸けられていると記録している。小倉城の北の丸の橋を見れば当時の大きさが分かる。

＜豊前國誌の築波橋＞

築波大橋は何れの頃より掛りし歟。此橋者葛原湯川の村下より、下長野村の方へ通へる往還也し事をいふ。應永戦乱の時迄は大汐満登りて築波の橋に上り、三日の間軍を止め、神田驛にむな敷宿陣せんと見ゆ。欄干に義寶珠もありし杯いふ。いぶかし。其後狸山の海手より御當家に成。百年計跡、大堤を築出せし新開、則今の開作新地也。是三番開作とす。
（http://www.geocities.jp/kikunosato2005/sub81.html）

豊前國誌では「筑波橋」と言われている。應永戦乱の時までは大潮が上ってくると橋が水没して、三日間、軍を止めたといわれる。この橋の名前は「筑波」である。現在では「筑波」といえば、茨城県つくば市をさすが、九州天皇家の筑波は企救半島・筑波であった。従ってこの橋の名前が「筑波橋」は当然である。「筑波」とはここを流れる川の名前「竹馬」と同じであろう。

＜村誌の蜷田村竹馬橋＞

村の東にあり、古時着場の海の入江にして。船の着場なりしに因て名とす。本村蜷田の稱も、湊の字に起る。和気清麿卿及び菅原道真卿筑紫に左遷在し時、此湊に船を掛らる云々、
古より言傳へり。此橋保元二年平判官康盛の所造。慶長年中細川氏小倉に引て、城内北丸の橋となし、石橋に改む。今猶僅かに在す。以上小倉誌より
（http://www.geocities.jp/kikunosato2005/sub81.html）

蜷田村の橋の名は「竹馬橋」である。「村の東にあり、古時着場の海の入江にして船の着場なりしに因て名とす。」と書かれている。この村の名前は蜷田（ニナタ）であるが、湊（ミナト）が訛って「ニナタ」となったと由来を書いている。元々ここに架かっていた橋を小倉城の北丸に使い、石橋を架けたということも企救郡誌、着場橋と同じである。

竹馬橋の下は入り江となっていた。村誌にも「和気清麿卿及び菅原道真卿筑紫に左遷在し時、此湊に船を掛らる云々、」と記録している。ここが湊であった。「企救郡・着場橋」「豊前國・筑波橋」「蜷田村誌・竹馬橋」は全て同じ橋をさす。ここまで海が入り込んでいて大きな船が停泊していたのである。

此処の辺り一帯、数十年前まで大雨が降ると田んぼも道も水に浸かって、まるで海原のようでした。 (http://www.geocities.jp/kikunosato2005/sub81.html)

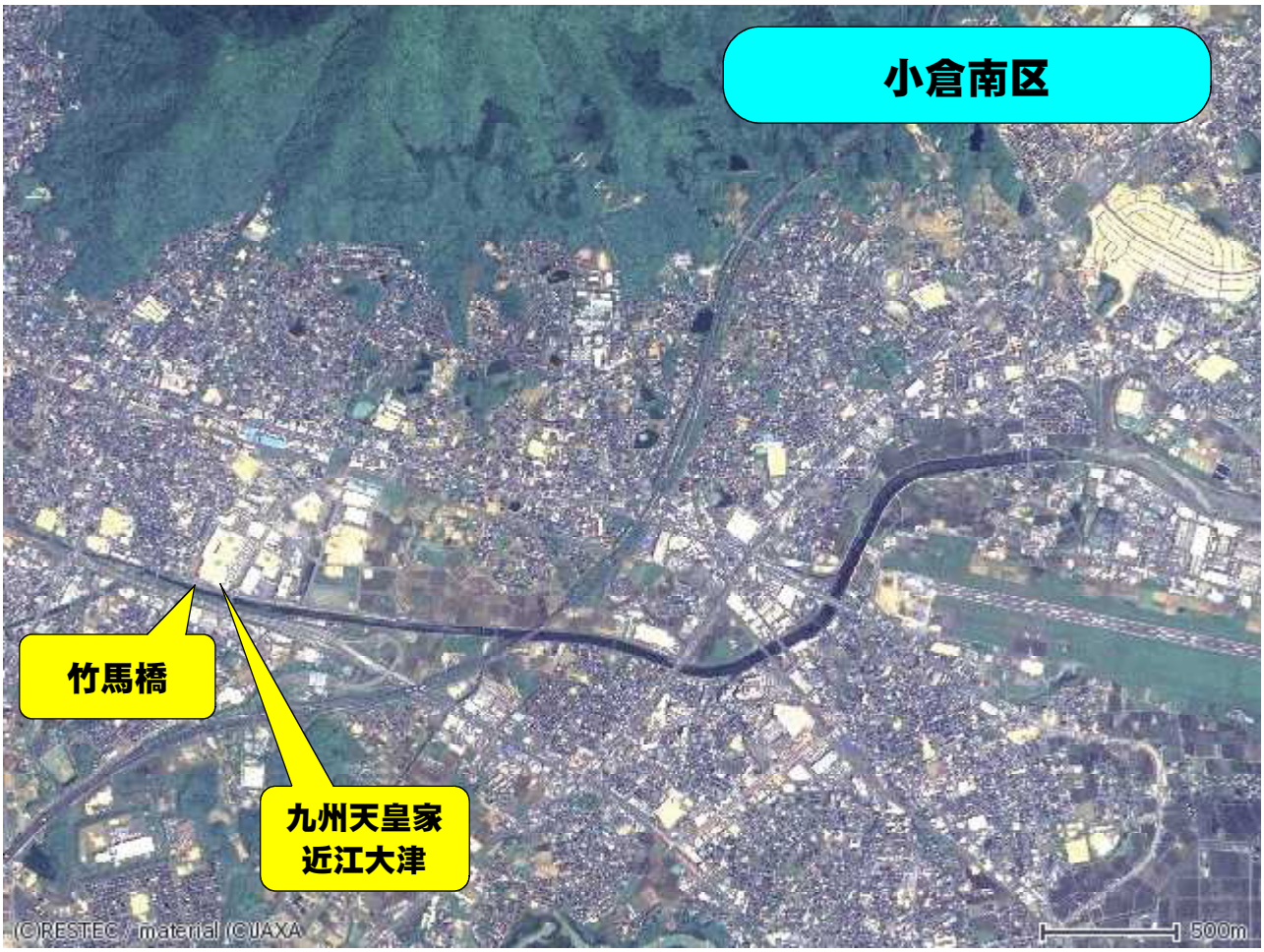
九州天皇家の都、近江大津

記録から古来ここに湊があったことがわかる。湊の名前はそれぞれの記録書によって異なるが、現在に残る名前は竹馬橋である。地図でその場所を確認しよう。ご覧のように現在の地勢から見るとかなり海岸線から内に入った所となる。とてもここに湊があったとは思えないが、しかし、企救郡誌、豊前國誌、蜷田村誌ともここが入り江で湊があったと記録している。都から流されてきた和気清麿を乗せた船も菅原道真を乗せた船も停泊できたほどの湊だったのであるから、水深も相当あったのであろう。

ここが大きな船が停泊できる湊、「大津」だったのであろう。そして、竹馬橋付近が九州天皇家の「近江大津」であるならば、「大津宮」もこの近くに存在したことと思われる。竹馬橋の下流に石群が残っている。これは大津宮の礎石であろうか。

九州天皇家の淡海の海は満潮と干潮によってその姿を大きく変えていた。竹馬橋の下が湊となっていたという小倉誌の記録から考えると満潮時にはそこまで海水が上っていたのである。

九州天皇家の近江大津宮はどこに存在したのか。古代の湊は竹馬橋の少し下流にあったと記録に残る。



近江大津の宮の天皇の御代、紫野の歌

天皇の蒲生野に遊猟したまふ時、額田王の作る歌　２０

　　あかねさす　紫野行き　標野行き　野守は見ずや　君が袖振る

皇太子の答へましし御歌　２１

　　むらさきの　にほえる妹を　憎くあらば　人妻ゆえに　われ恋ひめやも

万葉集人気*No. 1* の歌である。四つの「キ」の音がこの歌にまっすぐな力を与えている。三つの「ノ」の音が「キ」の勢いを柔らげている。二つの音の交響がこの歌を名歌にしている。

この歌は恋の歌であるが、大人の落ち着いた恋の歌である。どうしようもなく恋い焦がれている若い男女の歌という感じはない。嘗て、子をなしながら別れざるをえないお互いの運命を受け入れ、未だお互いを気遣っている成熟した人間の愛を感じさせてくれる。

＜人妻ゆえに　われ恋ひめやも＞

この下の句をどう読むか。これが結構難しい。萬葉集（日本古典文学大系）・補注*21*を見てみよう。

人妻という単語だけで、当然、他の人間がそれを恋うてはならないことが示される。従って、自分がその人を恋するはずはないのである。しかも、自分は恋している。そこで「紫草のように美しい面立ちのあなたが憎いならば、あなたはすでに恋してはならない人妻ダノニ私が恋するということがあるものものか」という表現になる。

補注21の云わんとすることは何か。「ユエニ」を「ダノニ」と解せよ、という。だが正直誠に分かりにくい言い回しである。人を恋するのに、憎しみで恋する人はいない。相手が人妻であろうとなかろうと、人を恋するのは愛するユエである。また人妻ユエに恋するのでもない。補注21の解説は歌の意とは少し異なるように思う。

「人妻ゆえに」は普通に解釈して「人妻であるからという理由で」「人妻であるからといって」という意味であろう。天武と額田王は一人の兒をなしている。この二人の関係を考えると、「人妻ゆえに」は「今は人妻になってしまったからといって」と云う気持ちが込められているように思える。「憎くあらば」は、自分の元を去らざるをえなかった額田王の悲しみを理解した上での天武のいたわりの言葉であろう。今は近江大津の宮の天皇の妻となってしまっている額田王に憎しみの感情を持っていない。むしろいたわっているのである。

貴女が私の元を離れ近江天皇の妻になってしまったからといって、私が貴女を憎むなんてことはありませんよ。私の愛は変わりません。貴女は私にとっていつまでも“紫のにほえる”人ですよ。

これが天武のメッセージであろう。二人はいつまでも恋の感情を持ち続けているようである。もう若くなく、近江大津の宮の天皇の下で孤独であったと思われる額田王はさぞ嬉しかったであろう。天武は額田王を案じて遠くから袖を振って“変わりないか？幸せにやってるか？”とメッセージを送ったのであろう。むろん天皇の妻に声をかけて親しく話すなど許されることではない。袖を振るのが精一杯の行為であろう。額田王はそれさえ心配する。

ここは絹布の染料である紫草を栽培している直轄地ですよ。野守を置き管理を厳しくしています。私は元気ですよ。だから心配しないで。そんなに袖を振っては野守の役人が見てしまうでしょう。

天武は大胆な歌を返した。しかしこの天武の返歌には隠れた意味が存在するように思える。この時すでに天武は兄より上位にいた。そのことを誇示しているように思える。

「天皇の蒲生野に遊猟したまふ時」と題詞に書かれた天皇とは近江大津宮の天皇である。その近江大津宮は小倉南区の淡海（近江）にあった。一般に「大津の宮」とは琵琶湖畔で発見された錦織遺跡と考えられているが、その地は九州天皇家とは無関係である。九州天皇家において「近江」「淡海」といわれた海は一貫して小倉南区・曽根の海である。

歌は小倉南区・近江から「蒲生野」へ狩に出かけた時の歌で、作歌場所は「蒲生野」である。「蒲生野」は「紫野」と歌われている。また「標野」とも歌われている。幸いこの地名は現在に残る。小倉北区蒲生である。この九州天皇家直轄地では染料の紫草が栽培されていた。小倉南区の竹馬橋から蒲生まで約４．３ｋｍである。

景行天皇・「近江國志賀」の高穴穂宮

天武の兄である「近江天皇」が住んだ「大津宮」は小倉南区にあった。ここにはすでに九州天皇家の宮が存在していた。この地に初めて宮を作ったという記事が出てくるのは景行紀である。景行紀は「熊襲」と九州天皇家との戦闘の生々しい記録である。

冬十月に碩田國に到りたまふ。其の地形廣く大きにして亦麗し。因りて碩田と名く。速見邑に到りたまふ。女人有り。速津媛と曰ふ。一所の長たり。其れ天皇の車駕すと聞りて、自ら迎え奉りて諮して言さく、「此の山に大きなる岩窟有り。鼠の石窟という。二の土蜘蛛有り。其の石窟に住む。一をば青と曰ふ。二つを白と曰ふ。(1)又直入縣の禰疑野に、三つの土蜘蛛有り。一をば打猿と曰ふ。二をば八田と曰ふ。三をば國摩呂と曰ふ。是の五人は並びに其の為人強力くして、亦衆類多し。皆曰わく「皇命に従はじ」というふ。若し、強に喚さば、兵を興して距かむ」とまうす。天皇悪したまひて、進行すこと得ず。即ち(2)来田見邑に留りて、かりに宮室を興して居します。よりて群臣と議りて曰わく「今多に兵衆を動かして、土蜘蛛を討たむ。若し其れ我が兵の勢いに畏れて、山野に隠れてば、必に後の愁いを為さむ」とのたまふ。則ち海石榴樹を採って、椎に作り兵にしたまふ。因りて猛き卒を簡びて、兵の椎を授けて、山を穿ち草を排ひて、石室の土蜘蛛を襲いて、(3)稲葉の川上に破りて、ふつくに其の輩を殺す。血流れてつぶなきに至る。亦血の流れし所を(4)血田という。復、打猿を討たむとして、ただに禰疑山を渡る。時に賊鳶の矢、横に山より射る官軍の前に流ること雨の如し。天皇、更に城原に返りまして、水上に卜す。便ち兵を整えて、先ず八田を禰疑野に撃ちて破りつ。ここに打猿え勝つまじと謂いて「服はむ」と請す。然れども許したまはず。皆自ら谷に投りて死ぬ。　（日本書紀・景行天皇）

景行は九州天皇家の中興の祖である。神武が征服した国家を再度征討し完全に支配下に治めた天皇である。その戦跡は小倉南区に残る。

(1)「直入縣の禰疑野」とは「禰疑山」、つまり、「貫山」の裾野に広がる平野のことである。
(2)「来田見邑」とは「朽網」である。
(3)「稲葉の川上」とは出雲神話で有名な「因幡」「稲葉」である。古代出雲國は小倉南区に存在した。
(4)「血田」とは、後に、「津田」と名前を改めた小倉南区津田のことである。
(5)　景行が討った土蜘蛛「青」「白」の首を「上塚」、胴を「中塚」、その他を「下塚」に分けて葬った。その塚が小倉南区曽根に存在する。

同じ記録が企救郡誌にある。

＜企救郡誌の祢疑山＞

日本書記景行天皇巻に、復将、討、打援、径度、祢疑山と記されたり。

祢疑山は今の奴木山也。ネヌ同じ音なるに依、早くより移りたると見えて、安閑紀に大抜と書れたり。今云平尾山の東の峯也。
里人曰、昔景行天皇石室の土蜘蛛を討むとて、甚く攻給ひしに、悉く抜けて此処に到る。仍て此里を貫けと云ふ。今云貫是也云々。

「祢疑山」とは「貫山（奴木山）」のことである。景行は晩年の58年に、土蜘蛛を倒し、小倉南区の曽根に宮を建てた。それが「近江國志賀の高穴穂宮」である。万葉集の「近江大津宮」天皇の宮も「近江の大津宮」である。景行の「高穴穂宮」と万葉の「近江大津宮」とはほぼ同じ場所に存在したと思われる。「近江の志賀」には「辛崎」という名前の船着き場があった。小倉南区の曽根の海は「淡海」である。曽根干潟に潮が満ちてきた時、淡海となり、「辛崎」も潮が満ちて、船の出入りが可能だったのである。

明日香清御原宮の天皇の御代、伊勢の歌

十市皇女、伊勢の神宮に参赴りし時、波多の横山の巌を見て吹刀自（ふきのとじ）の作る歌
22　河上のゆつ岩群に草生さず常にもがもな常處女にて

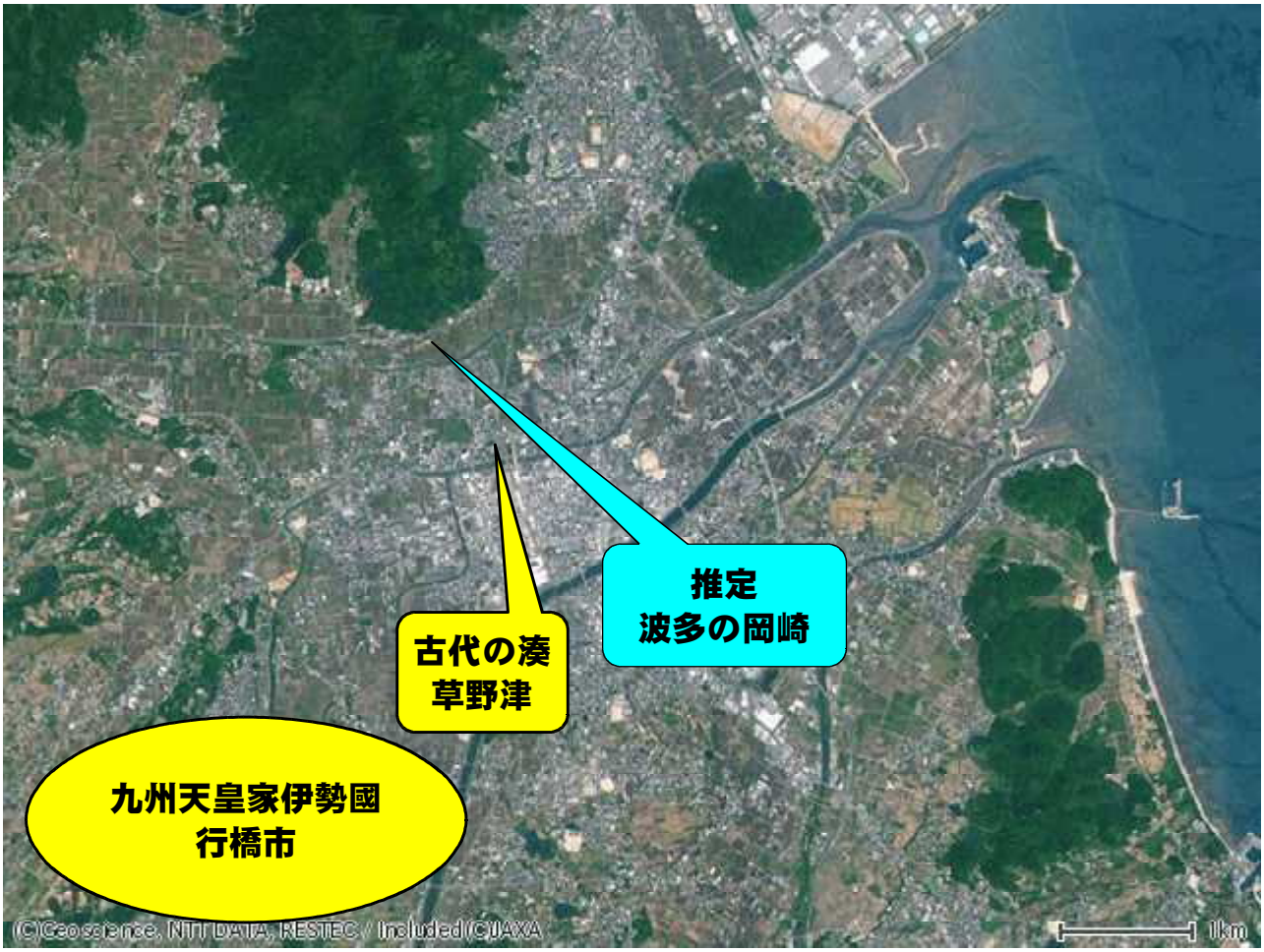
吹刀自未だ詳らかならず。ただし、紀に曰はく、天皇四年乙亥の春二月乙亥の朔の丁亥、十市皇女、阿閉皇女、伊勢の神宮に参赴るといへり。

十市皇女は天武と額田王の間に生まれた皇女である。22番歌が詠まれた時の伊勢神宮参拝の記事が日本書紀にある。参拝は675年2月1日である。

日本書紀天武紀
天皇四年乙亥の春二月乙亥の朔の丁亥、十市皇女、阿閉皇女、伊勢の神宮に参赴るといへり。

十市皇女は678年（天武7年）に急逝したと伝えられる。この歌は亡くなる3年前に伊勢神宮に参拝した時の歌である。この675年の伊勢神宮参拝は九州天皇家の伊勢神宮である。
天武の壬申の乱、蜂起の拠点は「伊勢國」だった。この「伊勢國」は九州天皇家の「伊勢國」で、行橋市である。「伊勢國」には「鈴鹿郡」、「桑名郡」、「三重郡」が存在した。壬申の乱に登場する「鈴鹿」・「桑名」・「三重」は全て行橋市に存在した郡の名前である。壬申の乱は「伊勢國（行橋市）」と「河内（小倉南区）」が主戦場だった。天武は壬申蜂起に勝利できたお礼に十市皇女と阿閉皇女を九州天皇家の伊勢神宮に遣わした。随行した吹刀自は「波多の横山」の巌を見て詠った。

この「波多」は、九州天皇家の始祖、神武天皇が戦った豪族、「波多丘岬の新城戸畔」の名前に書かれた「波多」と同じ地名である。神武が戦ったのは「伊勢（居勢）」の豪族、「層富縣の波多丘岬の新城戸畔」であった。この「波多丘岬」と十市皇女が「伊勢」の神宮に参拝した時、吹刀自が見て詠った、「波多の横山」とは同じである。どちらも九州天皇家の「伊勢」、行橋市の「波多」である。神武記では「波多丘岬」と書かれている。つまり「波多の岡崎」である。万葉集では「波多の横山」である。「岡崎」も「横山」も同じ山をさしているのであろう。



明日香清御原宮の天皇の御代、麻続王の伊勢の歌

麻続王の伊勢國の伊良虞の島に流さるる時、人、哀しび傷みて作る歌　２３
　打ち麻を　麻続王　海人なれや　伊良虞の島の　玉藻刈ります

麻続王、これを聞きて感傷みて和する歌　２４
　うつせみの　命を惜しみ　浪にぬれ　伊良虞の島　玉藻刈りをす

題詞は「伊勢國の伊良虞の島に流された」と書く。しかし、後注は異なる解説を載せている。

右、日本紀を案ふるに曰はく、天皇四年夏四月、三位麻続王罪有り、因幡に流される。一子は伊豆の嶋に流さる。一子は血鹿の嶋に流さるといへり。ここに伊勢國伊良虞の嶋に配されるといふは、けだし後人歌の辞に縁りて誤り記せるか。

麻続王が流されたのは「伊勢」ではなく、「因幡」だというのが後注者の主張である。天武紀下に次の記事がある。

三位麻続王罪有り。因幡に流す。一の子をば伊豆嶋に流す。　（日本書紀・天武天皇下）

日本書紀では麻続王の配所は「因幡」である。万葉集の題詞は「伊勢國」に流されたとする。「常陸國風土記」では「行方の郡」である。作歌者三位麻続王については伝未詳となっているが、一つの手がかりが「伊勢國風土記」にある。

＜伊勢國風土記・麻続郷＞

麻続の郷と号くるは、郡の北に神あり。此の神、大神の宮に荒妙の衣を奉る。神麻続の氏人等、此の村に別れ居りき。因りて名と為す。

「大神」とはむろん「天照大神」である。「伊勢神宮」の「天照大神」に献上する衣を「伊勢國」の麻続の郷の人が織っていた。三位麻続王とはこの村の領主だったと思われる。天武王朝で三位にあった麻続王が何かの罪で流されることになった。その配所が出身地の「伊勢國」の伊良虞の島だった。「伊勢國」の人々は当然、麻続王のことをよく知っていた。故に「伊勢國」の人々はこの王が故郷の「伊勢國」の伊良虞の島に流された時、“哀しび傷みて”歌を作った。「打ち麻」とは「天照大神」に奉納する麻の夏着である。麻も木綿も繊維を柔らかくするために打ったことから「打ち麻」「打ち木綿」と云った。

打ち麻を　麻続王　海人なれや　伊良虞の島の　玉藻刈ります

本来なれば麻を打って伊勢神宮に奉納するはずの麻続王が今は海人となって海草を刈っているというではないか。

麻続王が流されたのは「伊勢國」の「伊良虞」の島である。この「伊勢國」は九州天皇家の「伊勢」、行橋市である。尚、日本書紀が記載する配所、「因幡」も九州天皇家の「因幡」である。九州天皇家の「出雲國・因幡」は小倉南区に存在した。九州天皇家の「因幡」と「伊勢國」はそんなに離れていない。最初は「因幡」に流され、そこから故郷の「伊勢國」へ移されたと考えることもできる。

九州天皇家の「伊勢」はよく歌に登場する。大津皇子が「伊勢神宮」にいた姉を密かに訪ねたとき、姉の大伯皇女が詠った相聞歌がある。

大津皇子、竊（ひそ）かに伊勢の神宮に下りて上り来ましし時の大伯皇女の御作歌二首

105　わが背子を　大和へ遣ると　さ夜深けて　暁（あかとき）露に　わが立ち濡れし

大伯（大来）皇女が竊（ひそ）かに会いにきた弟を密かに送った哀切きわまる別れ歌である。暁の露は冷たい。ここで「倭」を「大和」と“翻訳”しているが、原文は「倭」である。

吾勢　乎　倭邊遣登　佐夜深而　鶏鳴露に　吾立所霑之

「倭」とは九州天皇家の都、香春町、田川市である。「伊勢」とは九州天皇家の「伊勢」、行橋市である。行橋市神田町から田川市魚町までの道のりは１９．１２ｋｍ。この間、徒歩で約３時間４９分である。題詞に書かれているように、「倭」を早朝発って「伊勢」に到着し、暁に「伊勢」を発ち翌朝、「倭」に戻ることは可能である。「下りて上り」とはこの行程をいったものであろう。

大津皇子は天武天皇が亡くなってから二十余日後、６８６年10月2日に謀反を企てたことが発覚、翌日処刑された。まだ24歳であった。

１０６　二人行けど　行き過ぎ難き　秋山を　いかにか君が　ひとり越ゆらむ

大伯皇女は紅葉の秋山を越えて、「倭」に向かう弟を早朝の露に濡れて見送った。「秋山」とは大坂山を云ったのであろうか。やがて季節は冬。大津皇子にとっても冬の時代となると歌った大伯皇女の予測通り、大津皇子は謀られて死に追いやられた。

万葉集は大津皇子が死んで後、「伊勢（行橋市）」から「京（太宰府）」へ上って来る時の大伯皇女の挽歌を二つ載せている。

１６３　神風の　伊勢の國にも　あらましを　なにしか来けむ　君もあらなくに
１６４　見まく欲り　わがする君も　あらなくに　なにしか来けむ　馬疲るるに

万葉集はこの挽歌の後に、持統の実子、草壁皇子への人麿挽歌を載せるが、心に伝わってくる哀切さにおいて大伯皇女のこの歌に遠く及ばない。

ここまで万葉集で「伊勢」と言えば、全て九州天皇家の「伊勢」、つまり行橋市である。だが、なぜ、万葉編者は「伊勢」に係わる歌を三つ載せたのであろうか。それは「伊勢」が天武の壬申の乱に繋がる歌だからである。

明日香清御原宮の天皇の御代、耳我の嶺の歌

万葉集26番歌　天皇の御製歌
み吉野の　耳我の嶺に　時なくぞ　雪は降りける　間なくぞ　雨は降りける　その雪の　時なきがごと　その雨が　間なきがごと　隈もおちず　思ひつつ来し　その山道を

吉野の國の耳我の嶺に　止むときもなく　雪が降っている　止む間もなく　雨が降っている　その雪が止むときがないが如く　その雨が止む間がないが如く　山道の曲がり角も気づかないほど　思案にくれて　耳我の嶺の山道を登ったことである

時は白村江の敗戦後である。もしかすると唐との国家存亡をかけたファイナル、最終戦が勃発するかもしれない。日本國天皇家は不安の最中にあった。天智に心中を問われた九州天皇家天武はいかに考えていたのか。

日本國天皇家は我が胸中を疑っている。耳我の嶺に降る雪のように、耳我の嶺に降る雨のように、我が身に冷たい視線が注がれている。世を捨てよう。日本國天皇天智の病気祈願のため耳我の嶺で修行する。この道だけが明日につながる希望の細い道である。たとえその道に雪が降ろうと、雨が降ろうとこの道を歩むほかない。

耳我の嶺の山道のみが生存への道であった。九州天皇家の人々は天武のこの決断の意味がよく分かっていた。天武のこの歌は苦悩の歌である。壬申の乱を起こした天武の苦悩を象徴するような歌である。九州天皇家にとって天武の代はこのような苦悩の代ではない。天武の代の歌６首は壬申の乱に絡む歌ばかりであるが、その中には勝利の歌も喜びの歌もない。

天武の「飛鳥浄御原宮」は田川市に存在した

壬申の乱に勝利した天武は天武２年（６７３年）２月２７日に有司に命じて壇場を設けて、飛鳥浄御原宮に即位した。天武紀では勝利した天武は６７２年９月、「伊勢桑名」に泊まり、「鈴鹿」、「阿閉」、「名張」を経て「嶋宮」に戻ったと記録している。この「嶋宮」とは下関市彦島に存在した天武の宮のことである。この宮に妻の菟野皇女（後の持統）も草壁皇子も住んでいた。その後、天武は「岡本宮」に移る。この宮は「高市岡本の宮の天皇」の宮である。天武はこの天皇の「岡本宮」の南に新たな宮を建設し、冬に遷った。この天武の宮を「飛鳥浄御原宮」といった。

九州天皇家の伝承である古事記には「飛鳥」という地名が記録されている。この地名は履中記に登場する。仁徳天皇の後の皇位を継いだのが履中天皇である。履中が難波の宮に居た時、宴会で酒に酔いつぶれた履中を弟、墨江中王が殺そうと図る。「難波の宮」とは仁徳の宮である。仁徳は九州天皇かの「難波」、小倉北区に宮を構えていた。仁徳の子ども履中もまたこの宮に居た。
墨江中王は宮に火を放って焼死させようと図るが、「倭の漢直」の祖、阿知直という人物が履中を助けだし、「倭（やまと）」に逃れていく。「倭（やまと）」とは、田川市（香春町）である。「大坂の山口」に到った時、一人の少女に出会い、その少女が兵を待ち伏せしていると知らせる。そこで彼らは異なる道（當岐麻道）を通って無事、「倭」の「石上神宮」に着く。
九州天皇家の「難波（小倉北区）」から九州天皇家の「倭（香春・田川）」への道は小倉南区・苅田・行橋市を通って香春に到る国道１０号線、県道３４号線、県道２０４号線である。「大坂の山口」とは行橋市から香春町に抜ける国道２０４号線の大坂山の登り口付近であろう。

履中の物語にはもう少し先がある。履中にはもう一人弟がいた。その弟、水齒別命は履中から「身の潔白を証明しろ。墨江中王を殺せ。」と迫られる。そこで水齒別命は「難波」に下って、墨江中王の配下である隼人、曾婆加里（そばかり）をだまして墨江中王を殺させる。その後、水齒別命は曾婆加里を伴って「倭（やまと）」の履中の下に行くのであるが、途中、大坂の山口まで来た時に、「今日は倭へは行かない。明日行こう。」と、そこに留まる。

故、曾婆訶理を率て、倭に上り幸でます時、大坂の山口に到りて以爲（おも）ほしけらく、曾婆訶理、吾が為には大き功有れども、既に己が君を殺せし、是れ義ならず。然れども其の功に賽（むく）いぬは、信無しと謂ひつべし。既に其の信を行はば、遷りて其の情こそ惶（かしこ）けれ。故、其の功に報ゆれども、其の正身を滅してむとおもほしき。是を以ちて曾婆訶理に詔りたまひしく、「今日は此間に留まりて、先づ大臣の位を給ひて、明日上り幸でまさむ」とのりたまひて、其の山口に留まりて、即ち假宮を造りて、忽かに豐樂爲たまひて、乃ち其の隼人に大臣の位を賜ひ、百官をして拜ましめたまふに、隼人歡喜びて、志を遂げぬと以為（おも）ひき。爾に其の隼人に詔りたまひしく、「今日大臣と同じ盞の酒を飲まむ。」とのりたまひて、共に飲みたまふ時に、面を隠す大鋺に、其の進むる酒を盛りき。是に王子先に飲みたまひて、隼人後に飲みき。故、其の隼人飲む時に、大鋺面を覆ひき。爾に席（むしろ）の下に置きし劒を取り出して、其の隼人の頸を斬りたまひて、乃ち明日上り幸でましき。故、其地を號けて近飛鳥と謂ふ。上りて倭に到りて詔りたまひしく、「今日は此間に留

まりて、祓禊を為て、明日参出て、神宮を拜まむとす。」とのりたまひき。故、其地を號けて遠飛鳥と謂ふ。故、石上神宮に参出て、天皇に奏さしめたまひしく、「政既に平け訖へて参上りて侍ふ。」とまをさしめたまひき。爾に召し入れて相語らひたまひき。天皇、是に阿知直を始めて、藏官に任け、亦粮地を給ひき。

「大坂の山口」は隼人を殺した翌日（明日）に「倭」に上ったことから、「飛鳥（明日か）」という地名で呼ばれるようになり、翌日、「倭（やまと）」の石上神宮に居た履中天皇と会ったことから、その地が「遠飛鳥」と呼ばれるようになった。これが「飛鳥」の地名説話である。九州天皇家で「飛鳥」と呼ばれた「大坂の山口」は行橋市の大坂山の近くの集落であろう。そして「遠飛鳥」と呼ばれたのは田川市に存在した古代、石上神宮が存在した処であろう。

天武の宮の名前は「飛鳥浄御原宮」である。天武の宮は古代石上神宮が存在した「飛鳥」の名前をとったものである。履中の弟、水齒別命が次の反正天皇である。この天皇の宮は「多治比の柴垣宮」である。反正天皇の弟が次の允恭天皇である。この天皇の宮は「遠飛鳥宮」である。履中も允恭も古代石上神宮があった田川の古代「遠飛鳥」に宮を作って北九州を統治した。天武もまた九州天皇家の「飛鳥」の宮で即位したのである。この「飛鳥」は奈良ではない。田川市である。

九州天皇家終焉を暗示する天武天皇の御代の歌

万葉集では「泊瀬朝倉宮の天皇」から「明日香清御原宮の天皇」までの代の歌は九州天皇家の歌である。これらの天皇の代に歌われた「山跡」、「山常」、「八間跡」、「香具山」、「熟田津」、「紀の温泉」、「近江國」、「三輪山」、「蒲生野」、「伊勢」、「吉野」、「耳我の嶺」等は全て九州天皇家の國名、地名である。万葉編者はこれらの天皇の代の歌でもって九州天皇家の叙事詩とした。

神武が建国した「やまと」の國とは元々古代九州の覇者「熊襲」が統治した古代国家だった。「熊襲」の國は神武の時代にすでに「縣」という地方行政区を完備していた文明国家だった。「熊襲」とは中国の春秋時代の「楚」の國からの日本へ移住してきた弥生人である。移住は紀元前三世紀のことであろう。彼らは古代九州に自らの国家を建設し、「クマソ（熊襲・熊楚）」と称した。「熊」とは楚王朝の王の伝統の名前であった。神武が征服した香春・田川はその「熊襲の國」の一つだった。神武はこの國を征服したのち、「倭（やまと）」と称した。万葉歌の第一首、第二首で歌われた「やまと」とは九州天皇家の「倭（やまと）」の國である。万葉集はこの栄光の「倭（やまと）」賛歌から始まる。以降の天皇の代の歌はすがすがしく、明るい色調の歌が多い。

だが、天武の代の歌は「伊勢」流刑の歌である。そして天武の苦悩の歌である。天武の代に入って万葉歌は音調を変える。天武の代の歌は全て壬申の乱に絡んだ歌が集められた。壬申の乱とは唐への対応をいかにするかという国家戦略の相違がもたらした内乱であった。日本國天皇家天智は徹底抗戦論であった。しかし九州天皇家天武は和睦論であった。天武は乱に勝利し、唐との和睦路線を歩んだ。天武の戦略が適切だったと今は云えるであろう。百済、高句麗は唐の侵攻の前に滅んだが、日本は独立を保ち、國は栄えた。

万葉編者は天武の代に天武の蜂起の拠点であった九州天皇家の「伊勢」の歌を載せ、天武の苦悩の歌を載せた。ここには壬申の乱の勝利を誇るような歌はない。壬申の乱は九州天皇家にとって苦渋の選択だった。必ならずも蜂起した。ここには日本國天皇家に対する配慮が見られる。

天武は壬申の乱に勝利して天皇の位に上った。そして太宰府で天下を治めた。当然、天武は王として多くの歌を詠んだであろう。しかし、万葉編者は天皇に即位した天武の歌を天武の代に載せてはいない。天武の代は九州天皇家にとって最も栄光ある御代である。太宰府が日本の首都であった。最も輝いた天武の御代だったのにも関わらず、万葉編者は栄光の歌も勝利の歌も載せな

かった。それどころか、流刑の歌と苦悩の歌を載せた。まるで、天武の次の代に九州天皇家の暗い運命が待っていることを暗示するかのように暗い歌を載せた。

麻績王の伊勢の國の伊良虞の島に流さるる時、人、哀しび傷みて作る歌　２３
打ち麻を　麻績王　海人なれや　伊良虞の島の　玉藻刈りおす

麻績王は九州天皇家伊勢の國の「打ち麻」を天照大神に納めてきた名家である。それなのに海人でもないのに伊良虞の島の若布を刈っておられる。いたましいことである。

麻績王　これを聞きて悲傷して和ふる歌　２４
うつせみの　命を惜しみ　浪にぬれ　伊良虞の島の　玉藻刈りをす

流人となった今、現身の命を惜しんで、浪にぬれて伊良虞の島の若布を刈って食べ、生き延びています。

麻績王が流された伊勢國とは九州天皇家の伊勢、行橋市である。麻績王の家系はここで天照大神を祀ったいた伊勢神宮に麻布を治める名家だった。その故郷へ麻績王は流されたのである。麻績王の領民が悲しんだのは言うまでもないことであろう。そして麻績王の悲しみも一層であったろう。麻績王の辿った運命はのち人麿が辿った運命である。万葉編者はそれを暗示するように天武の代の流人の歌を載せた。そして持統の代に人麿の流刑の歌を載せた。

天武の代の歌でこの章を終わることにする。次は持統の代の歌であるが、持統の代に時代が大きくかわる。古代史の転換点に立つのは持統である。持統の代は二つに分かれる。九州天皇家の時代と奈良藤原京の時代である。万葉の歌も二つに分かれる。九州天皇家時代の歌の主役は柿本人麿である。そして奈良藤原京の時代には人麿の歌はない。人麿の人生は持統奈良遷都によって終わったといってよいであろう。人麿は麻績王と同じく周防灘に面した鴨山で死んだ。
では次章で持統の代の歌に入っていくことにしよう。